

本校社会科における「開発教育」の試み

I. 開発教育の取り組み

II. 中3公民分野における「開発教育」の実践

(担当者 林 幹一郎)

筑波大学附属駒場中・高等学校・社会科

林 幹一郎・小林 汎・小澤富士男
丸浜 昭・宮崎 章
岡本 忠篤・城戸 一夫

I. 「開発教育」への取り組み

1. はじめに

社会科プロジェクト研究として、1987年～92年にかけて「開発教育」の問題に取り組んできた。

1987年	平和教育の今日的課題と実践—開発の問題を中心に	(代表 宮崎 章)
1988年	開発教育の研究—平和教育の各論的研究(1)	(代表 城戸 一夫)
1989年	開発教育の理論化と教材開発 —平和教育の一環としての開発教育のあり方—	(代表 城戸 一夫)
1990年	開発教育の研究—平和教育の各論的研究(2)	(代表 小澤富士男)
1991年	開発教育の研究—平和教育の各論的研究(3)	(代表 小林 汎)
1992年	開発教育の研究—平和教育の各論的研究(4)	(代表 丸浜 昭)

研究内容としては、以下に掲げるようなことを目標としてきた。

開発教育を、単なる〈開発援助〉を推進するための教育面での政策的補完として認識するのではなく、広く〈平和教育〉の一分野として位置づけ、Paulo Freireの主張するように、〈開発〉を「批判的な自覚意識の深化の過程」＝「意識化」の過程」と捉え、「政治、経済、社会的矛盾を知覚するための教育」＝「現実の抑圧の要素に対して行動を起こすための教育」、「自己を発見し、同時に矛盾や抑圧の要因に満ちた現実を変革しようとする可能性の具体化のための教育」、「生徒をして自らの開発と、自らが住む世界への参加を可能とする教育」が、あるべき〈開発教育〉であると考ええる。

なお、〈開発教育〉が、単に一国内や特定教育関係者の関心事や課題にとどまるものとならないために、「新国際経済秩序」(1974年国連総会第6回特別会議宣言)、「ユネスコ第3期中期計画(1990～94年、特に開発関係)」、「開発のための原則と方法と活動の戦略」その他の、国際的に承認され、日本国政府も批准した公文書の精神を導入することも有効と考える。

具体的には以下の6項目を研究・実践の課題とした。

1. 先行文献・資料の収集並びに研究
2. 〈開発教育〉の位置づけ・概念・理念の確定
3. 〈開発教育〉の全体像の構成
4. 〈開発教育〉の各分野毎の主要テーマに関する教育実践案の作成
5. 上記テーマに関する教育実践
6. 上記研究諸活動推進のための定例研究会(外部講師招聘)

以下、主要な実践・研究の取り組みを整理してみる。

2. 「開発教育」への取り組み

1988年の第15回教育研究会において、社会科の公開授業で岡本が「開発と環境」を主題に、中学2年に「琵琶湖とその利用」の授業を、小林が「第三世界と民衆」を主題に「ラテンアメリカの農村と民衆」の授業を行い、その後の研究協議会では城戸が「平和教育の一環としての開発教育への取り組み」と題して発表を行った。

なお、小林は、城戸が従来から主張してきた平和教育において「構造的暴力」の問題をきちんと位置づけるべきであるの立場を踏襲し、世界地理の教育—特に第三世界の学習において「構造的暴力」の実態をあきらかにしようとした。第三世界の民衆の生活実態をリアルに描くことで、平和を脅かしている構造をつかまえ、さらにいかなる改革が第三世界の人々にとって必要なものかを考えるために開発教育を模索した。このラテンアメリカの実践は、『世界の平和をめざして』（平和教育実践選書Ⅲ，桐書房 1990.4）の中に「第三世界の民衆—ラテンアメリカの場合（高校）」の題で執筆した。

1990年には、第32回全附連高校部会研究大会（広大福山高）において、小沢が「地球社会の中で開発教育を考える」と題して報告を行った。本校の第17回教育研究会では、小沢が「地球社会と私たち」の主題で「サラワク州の森林伐採と地球環境」（中学3年）の公開授業を、林が「国際化時代の日本」の主題で「外国人労働者の人権」の公開授業を行い、研究協議会では「開発教育」の基本的な考え方をめぐって参加者と討論を行った。この場で、城戸は「開発教育の概念・目標」（資料1参照）を提示し、開発教育のとらえ方について提案した。

なお、この年小沢は『研究報告第30集』（1990年）に「宇宙船地球号の中で国際指呼会を考える—地球社会を考える学習」を執筆した。また小林（高1現社・地理）、林（高2現社）、宮崎・丸浜（高3日本史）、城戸（高2世界史）は、それぞれ年間学習指導計画を提示し、そこにおいて開発教育をどう取り入れるかプランを示した。

1991年は、本校で第33回全附連高校部会研究大会が開かれた。社会科分科会では小林が「社会科の中に開発教育をどう取り入れていくか」と題して報告した。そこでは本校での開発教育への取り組みを土台に、開発教育のあり方を提示するとともに、社会科の中での開発教育の位置づけを、小林の実践を例に説明をした。小林は、人権・平和・環境を社会科教育の3つの核に位置づけ、開発教育はその一部を構成するとし、「開発教育では、広い意味での地球開発の問題を正面にすえながら、地域（主として第三世界）の人々の生活向上のためには、人権確立のためには、「構造的暴力」をなくし平和を実現するにはどうしたら良いかを具体的に考えていく教育であり、しばしば第三世界に対して加害者としてふるまっている日本の問題をも見据えた、地域・日本・世界をつらぬく視点を持った教育である」と提案した。

また、この年は、神奈川県国際交流協会の荻村哲朗氏を講師に招き、「たみちゃシリーズ」などで、積極的に開発教育に取り組んでいる先進的事例を学ぶとともに、開発教育協議会、日本平和学会など資料を勢力的に収集した。

この間、APIC（国際協力推進協会）の要請をうけ、小林は「動くアジアガイドブック・APIC開発教育キットPART2」（1991）—スライドとそれを利用した学習展開例の副教材の作成、「アジアのうねり・APIC開発教育キットPART3」（1992）—ビデオとそれを利用した学習展開例の副教材の作成に参加し、本校での研究を普及した。

1992年～93年にかけては、国立教育研究所で検討された、開発問題学習カリキュラムの構造を

うけ、本校独自のカリキュラム構造のプランを検討した。国研の開発教育カリキュラム委員会では、9つの学習領域（A地球、B人口・国土、C食料、D資源・エネルギー、E生活・社会／生活問題、F南北問題、G開発問題、H国際協力、I人間の生き方）を設定し、それぞれの学資領域ごとに知的認識と関心・態度の両面から学習目標を定め、小・中・高別に一覧表を提示している。

本校では、この間の実践をふまえ、11の学習領域を設定してみた。1環境（地球環境・環境問題）2人口・人口問題、3食料・食料問題、4資源・エネルギー及びその問題、5産業・貿易（国際経済）、6国際協力・援助（国際関係）、7開発（地域開発）、8生活・文化（社会問題・民俗・民族問題）、9人権、10平和・軍縮、11歴史（歴史的背景）、以上の11である。このプランを具体化したものが小沢による高1現代社会の例である。（資料2参照）。

地理的分野、歴史的分野では残念ながら表は完成していない。なかなか、社会科として開発教育を全体の中で位置づけられないのが実態である。なお、小林は、'93年度の中1の地理的分野において、年間授業スケジュール表（資料3）に示しているように6月～11月にかけて、ビデオ「アジアのうねり」、岩波ジュニア新書『地球人として生きる』、新聞記事の利用などによって、開発教育の視点を前面に出し授業実践を試みた。また、高1の地理では、年間授業スケジュール表（資料4）に示しているように、第三世界の学習プラス日本を見つめなおす学習をセットにすることにより、第三世界から自分たちの足元へ視点を変えた時、自分たちは何をなすべきなのか考えさせる試みをし、全体像作成への試行を行っている。

林は'93年度中3の公民分野の学習において、開発教育を前面に立てて実践し、その緻密な実践報告をこの『研究報告 第33集』（1993）に執筆している。林・小沢の両名によって中3～高2にかけての公民的分野における本校での「開発教育」の一貫した流れ及び扱い方の特徴が明確になった。

また、小林は92年度の教育実習生と共に考えたアジア学習のプランにおいて、地理的教育に開発教育の視点を入れることにより、“生きた地理教育”になることを実践的に示した。（「地理教育と開発教育の接点－「南のアジアと日本－タイ人の目にうつる日本」の実践から－」（『地理教育』22号、1993、地理教育研究会））この実践は高校1年生対象のものであるが、この実践にヒントを得て、相模原市立鶴野森中学校及び、水沢市立水沢南中学校の中学1年生に「アジアと日本－アジアを食べる日本のネコ－」のテーマで公開授業を行い、地理教育の中に開発教育を組みこむ必要性を実践している。生徒と共にキャットフードの缶詰を食べながら日本とアジアの関係、タイの人々の暮らし、日本の「豊かさ」の歪みを考える学習は、意外性も手つだって好評である。

以上、本校社会科における開発教育の研究を中心とした、ここ6年間の社会科プロジェクト研究のあゆみを概観してみた。なお、個人研究に属する部分についてはカバーしきれず、筆者の活動に偏っているがあしからずご容赦願いたい。（文責 小林 汎）

1990. 11. 16

南米教育の概念・目標

第17回南米大学所長幹事会・高等学校教育研究会
社会学部 城戸 一夫

(1) 「工業国における学校内開教教育」(1974)

- ① 児童生徒に第三世界諸国のこと、いわゆる発展途上国と工業国との間の関係を知らせること。
- ② 児童生徒の生活、環境、経験などを結び付け教え、人間の近いや学校内外の社会的平等について、児童に新しい認識をもたせ、児童生徒が学校や地域社会の問題について自分の意見を表明できるようにしつけていくこと。

(2) 国連合同開発委員会(1975)

「開教教育の目的は、人々を自らが発展する社会、国家として世界全体の発展に参加できるようにすることである。参加のためには、社会的、経済的、政治的差別問題の理解に基づいて、地域の、国の、そして世界全体の状況をはっきり認識していないといけない。開教教育は、工業国、発展途上国それぞれにおける人間、人間の尊厳、自立、社会正義の問題と結びついている。開教教育の原因や目的の意味するものへの理解の促進、そして新しい国際経済社会秩序の研究手法とも関連している。」

(3) R. パーンズ教授(ストックホルム大学) = ニュース紙における用法

「開教教育は、人間、社会および社会変化にかかわるものである。開教教育は、人間と社会の問題にかかわるという点において開教教育であり、人間が自己と社会について学習する過程であるという意義の促進において教育なのである。したがって、それは開教のための教育の相互作用過程である。」

(4) イギリス海外開教省開教推進開発委員会

- 「われわれは開教教育という用語を、世界における社会・経済・政治の諸条件、とくに低所得国に関連し、低所得国とよびかかっている低所得国についての理解を深めていく意思と行動の促進を描くために使用する。その目的は、改革のための行動への関心を高めることである。そのために、
- ① 低所得国の諸問題を明確させる。
- ② それら開教への理解を促進し、そして新しい形の開教を促進しようとしている諸国、団体及び個人の努力の一部(しななければならない努力も含む)を支援する。
- ③ 世界の諸国間の相互依存及びその意味することについての自覚を深めさせる。

④ 自ら自身の開教、そして住んでいる地域、国、さらに世界全体の開教についての理解を深め、より積極的に参加させる。」

(5) J. ミラー・ワールド開発基金 = Global Education の概念

- ① アジア・アフリカ・ラテンアメリカの発展途上国とその人々、及び地球上の社会的、経済的、政治的状況の問題に関する平等を教える。
- ② 開教はすべての国に関わっているものであることを教える。
- ③ 国をよきと見做すに十分な理由を述べなければならないという責任を教える。
- ④ 公正、平等及び人間の尊厳を守り、すべての人々、とくに第三世界の人々の生活の質を改善していくように積極的に行動させる。

(6) ニュース紙における用法

「開教 = Development: 単に経済の発展をはかるという意味での開教ではなく、人間の発展、人間の尊厳と平和な生活が保障される社会を築くための教育(ニュース紙「開教のための教育」)

(7) ヘルバル・インド連邦政府文部次官(ニュース紙「人間の心の中に」1977)

「第一に、開教は人生の真の価値であり、工業化した国も発展途上の国も等しく求めているものである。人生の質は基礎的、普遍的な価値に基づくものであると同時に、それぞれの社会の伝統と歴史に基づくものである。(中略) その意味で、開教は社会的価値に属するものなのであり、幸福、合理性、開教、愛、同情、自由を奨励するものである。」

「別の観点、主として経済・社会構造、そして人間が自然を活用して創り出した生活の精神的秩序と安楽の概念、という観点からみると、開教は、互かた社会と互に社会との間に広がっている相互理解を促すことと主眼点である。互かた社会と互に社会との間には、それぞれの経済的、政治的、文化的な枠組みの中で生じている。そこでは、開教は同じトラクトの上での競争である。コースが定まっているので、問題はスピードである。経済的な平等競争からすると、開教ははるかに速く進むべきである。スピードはすでに急がれている。開教は加減速をつけて入手するに過ぎない、ということになる。」

「開教の第二の要素は、人間の素性の発現に属するものである。それはかつてのように宗教や宗敎の中でうなわれただけでなく、いまや人間の知識の発展的な目的へと、組織し行動していく人間の新しい能力によって、現実性をおびかす可能性として浮かびあがってきている。それは人間の精神を信じ、全世界が自分の誇りでありたいという夢と、すべての人間は自分の兄弟であるという確信とを、実際のものにしていくという力と、すべて人間の力を結ぶことを求めている。(中略) それは人類が地球上で生き残るための条件となっている。」

<資料1>

(8) 国連特別委員会(1980)における発言

「開教の過程は人間の尊厳を高めるためのものになっていなければならない。開教の最終目的は、すべての人々が開教に完全に参加し、そこから得られる利益を公平に分配し、そのことによって、すべての人々を豊かにせよとせよにすぎない。」

(9) 国立教育研究開発教育カリキュラム研究会の見解

- 「第一に、発展途上国の社会的開教をはかること、とくにそこに生きる人々の生活、文化、社会などの理解を深めること。
- 第二に、低所得国の担い手とその原因についての開教をはかること。
- 第三に、さらに、これらの担い手を支援し、人類社会の均質な発展を促す方法を考えること。」

<資料2>

高 1 年 科目 (現代社会) 担当者 (小澤 (富))

	学 習 領 域	学 習 事 項	事 項 解 説 あるいは 小 項 目
1	環境 (地球規模・環境問題)	7. 貧困が破壊する様 9. 地球温暖化 10. 地球温暖化がもたらすもの	砂漠化をもたらされる社会経済構造 温暖化の現状 温暖化は地球社会に何をもちたらずのか
2	人口・人口問題	3. 人口	人口動態と人口問題
3	食料・食料問題	1. 食べるということ 2. 食料	料理から見た食料問題 世界の食料需給関係
4	資源・エネルギー及びその問題	4. 石油 5. 省エネルギーの試み 6. 新しい社会経済システムの確立	石油の歴史と石油需給関係 エネルギー消費状況と温暖化物質 省エネルギーへの取組 二酸化炭素排出権市場創設と社会経済システム
5	産業・貿易 (国際経済)	14. 南北問題の現状	南北問題と何か バナナや農業から経済システムを考える 多国籍企業と環境破壊
6	国際協力・援助 (国際関係)	16. 温暖化防止から見た国際関係 17. ODAを考える	地球サミットへの歩み 日本のODAの現状と援助の意味を考える
7	開発 (地域開発)	15. 開発をめぐる	近代化と開発を通して豊かさの意味を考える サルボダヤ・ショラマダーナ運動を考える
8	生活・文化 (社会問題、民俗民族問題)	8. 今サラワクで起きていること	森林伐採と先住民社会の崩壊
9	人権	13. 世界子ども白書を読む	子ども・女性の社会的地位
10	平和・軍縮	11. 軍事費の増大がもたらすもの 12. 軍縮と環境	軍事費と独裁・貧困 持続可能な開発のために
11	歴史 (歴史的背景)		
(関心、態度形成) ○ 貧困・人口・食料・環境など地球社会に重大な危機をもたらす。様々な問題について考えさせる。 ○ 南側の現状を理解し、北側の人間に何が問われているのか考えさせる。 ○ 持続的開発のために何が問われているのか考えさせる。			(学習方法について) 授業

〈資料3〉

月	日	主な授業内容	主な授業内容	主な授業内容
9月	1	中・高で社会科学・地理の学習を始める。中・高で社会科学・地理の学習を始める。中・高で社会科学・地理の学習を始める。	南のアジア・オーストラリアの国	例。生徒の発表コメント(初回)
9月	2	地理の学習とはどのようなものか。地理の学習とはどのようなものか。地理の学習とはどのようなものか。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	知。 (自習)
9月	3	自分の住んでいる地域の特色を学ぶ。自分の住んでいる地域の特色を学ぶ。自分の住んでいる地域の特色を学ぶ。	カボビアとオース	31。 ランアンカ(406) ~ 手紙 ~
9月	4	地形図に慣れよう。地形図に慣れよう。地形図に慣れよう。	バカワラとエナヒヤ	32。 ランアンカ(406) ~ 手紙 ~
9月	5	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	南アフリカと日本	33。 <3学期? テキスト >
9月	6	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	日本を生きるということ。日本を生きるということ。日本を生きるということ。	
9月	7	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	8	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	9	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	10	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	11	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	12	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	13	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	14	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	15	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	16	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	17	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	18	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	19	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	20	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	21	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	22	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	23	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	24	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	25	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	26	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	27	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	28	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	29	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	30	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	31	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	10月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	11月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	12月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	1月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	2月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	
9月	3月	地形図の読み方。地形図の読み方。地形図の読み方。	地球人として生きる。地球人として生きる。地球人として生きる。	

〈 資料4 〉

月日	主な授業内容	主な授業内容	主な授業内容
1	オリエントレーション (マーカー)	スバイン、ポルトガルの裏面がたまらぬもの	授業の目的(402) - 地図の概観
2	社会科と地理、地理学習とは?(401)	ラランアメリカ経済の苦悩	〃 (403) - 京深そと戦争について
3	課題> 求む生活行動再発見 (402)	〃 (代表的) シェム、エリ、経済的発展	〃 (時間的) 授業で(カト)
4	君ごん意見とレポート作成して (402)	インフレ、不平等、果敢債務(404)	3
5	全編地理学習と地理的発展 (402)	ラランアメリカの農村と民族(401)(404)	< 3学期 > 来テラスト
6	1) 世界のどのあたりの国に存在するか?	(自習)	
7	2) 南のアメリカと民族	軍政と民族 (404)	
8	3) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
9	4) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
10	5) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
11	6) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
12	7) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
13	8) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
14	9) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
15	10) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
16	11) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
17	12) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
18	13) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
19	14) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
20	15) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
21	16) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
22	17) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
23	18) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
24	19) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
25	20) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
26	21) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
27	22) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
28	23) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
29	24) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
30	25) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
31	26) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
32	27) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
33	28) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
34	29) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
35	30) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
36	31) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
37	32) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
38	33) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
39	34) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
40	35) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
41	36) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
42	37) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
43	38) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
44	39) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
45	40) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
46	41) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
47	42) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
48	43) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
49	44) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	
50	45) エビと日本人、エビをアジア学習に活用	軍政と民族 (404)	

Ⅱ. 中3 公民分野における「開発教育」の実践

筑波大学附属駒場中・高等学校

林 幹一郎

1. 1993年度開発教育の前提となる公民カリキュラム

「開発教育」とは、発展途上国の諸問題を先進資本主義国との関係において理解することであり、そのグローバルな現代の国際社会の問題を自分の問題として受け止め、その解決のために努力する態度を育てることだと私は思っている。

けれども、発展途上国についてのさまざまな問題を理解するためには、どうしても、前提が必要である。産業資本の時代の資本主義社会の運動法則、独占資本の時代の植民地主義、戦後の国際経済の流れ、東西対立の動向などについて、基本的で、最小限の理解をもっていなければ、複雑な問題を捉えることは難しい。この考えの上に立って、1993年度の公民の授業では、「開発教育」に先だって、次のような授業を実施した。授業のテーマと主な学習事項を挙げておく。

1. 商品の価格はどのようにして決まるか。

需要・供給、生産費、労働価値、商品に共通の性質、人間労働の結晶、価値の大きさ、労働の量、社会的に必要な労働時間

2. 利潤はどのようにして生み出されるか。

売り上げ－生産費、機械・原材料の価格（過去の労働の価値）は商品の価格に移転、賃金、労働力の価値、労働力の再生産、生活手段の価値、労働力の使用価値（労働がつくりだす価値）、不払い労働部分、剰余価値、搾取、生産手段の所有者が商品の所有者

3. 利潤をふやすにはどのような方法があるか。

利潤率、剰余価値率、労働時間の延長、労働の密度の強化、技術革新による生産性の向上、拡大再生産

4. 恐慌は、なぜ資本主義経済の下で起きるのか。

景気の四つの局面、景気の循環、生産高、価格、賃金水準、利子率、倒産、失業率、所有の私的性格、生産設備の拡大、消費の低い伸び、過剰生産、周期性、固定資本の耐用年数、10年毎の設備投資

5. 独占資本の時期の資本主義経済には、どのような特徴があらわれるか。

生産と資本の集積、生産集中度、独占体、カルテル、価格協定、生産制限協定、自由競争の制限、独占価格、不等価交換、消費者収奪、独占利潤、金融資本（コンツェルン）の登場、銀行資本と産業資本の結合、資本の自由移動困難、不況の長期化、資本過剰の慢性化、資本輸出の著増、国際独占体、市場分割（販路）協定、資本主義列強による植民地分割競争、帝国主義、民族自決権の侵害

6. 金融資本はどのような方法で利潤をふやしていくか。

テイラーシステム、動作研究、作業の標準化、スピードアップ、中小企業・農民からの収奪、過当競争、下請け単価の切下げ、農畜産物の買いたたき、製品安の原料高、独占禁止法、管理価格、プライスリーダー、他社の暗黙の追随、投機利得、創業者利得、時価、額面、株価の理論値（配当÷市場利子率）

7. 第二次世界大戦は、どのような経済的対立を根底に持ちながら引き起こされたのか。

恐慌対策、為替の切下げ競争、保護貿易、関税戦争、ブロック経済、ポンド・ブロック、ドイツ広域経済圏、ドル・ブロック、大東亜共栄圏、過剰資本、資源獲得、植民地再分割要求

8. 第二次世界大戦はどのような性格を持ち、また、戦後の世界経済にどのような変化をもたらしたか。

帝国主義戦争、“持たざる”国、“持てる”国、反ファシズム戦争、ファシズム、指導者原理、全体主義、侵略主義、レジスタンス・パルチザン、共産党、民族解放戦争、社会主義世界の形成、植民地の独立、帝国主義国の市場の減少、ヨーロッパの荒廃、革命運動の高揚、アメリカの経済力・競争力・軍事力の絶対的優位

9. マーシャル援助は、戦後のヨーロッパとアメリカがかかえていた資本主義体制の危機を、どのような手段で打開しようとしたものか。

東欧・アジアの社会主義化、フランス・イタリアの共産党連立政権、トルーマン・ドクトリン、資本主義的生産体制の復興・強化、資金・資材の援助、共産党の政権からの排除、終戦による軍需物資大量輸出の消滅、アメリカの過剰生産恐慌の防止

10. 反ファシズムの共同行動や国連の成立にもかかわらず、米・ソはどのような手段によって東西対立を深めていったか。

“鉄のカーテン”、ソ連封じ込め政策、マーシャル援助、コミンフォルム（欧州共産党情報機関）、ベルリン封鎖、NATO（北大西洋条約機構1949年）、COCOM（対共産圏輸出統制委員会）、軍需物資の輸出禁止、WTO（ワルシャワ条約機構1955）

11. アメリカ支配層は、東西対立を激化させつつ、国内ではどのようなファシジョン的な政治を行ったか。

“赤のシンパ”の職場からの追放、マスコミの操作、共産主義＝“赤い全体主義”＝“民主主義の破壊者”、破壊者の人権保障無用、人権擁護団体、黒人運動、平和団体、ルーズベルトの

支持者，職場からの追放，議会，非米活動調査委員会への召喚，議会侮辱罪，大統領，公務員忠誠令，“不忠な団体”，裁判所，人権（思想・信条の自由，黙秘権など）侵害の黙認，法令審査権の不行使

12. アメリカはなぜベトナム戦争をしかけたのか。それはどのような結果をまねいたか。

南ベトナムの社会主義化防止と市場の確保，軍産複合体の利益，景気回復の期待，軍事独裁政権への経済・軍事援助，ベトコン，各個撃破政策，北ベトナムへの侵略，トンキン湾事件，ボール爆弾，ナパーム弾，枯葉剤，ジェノサイド，謀略，アメリカの道義の国内的・国際的低下，膨大な軍事支出，経済的地位の低下

13. IMF体制は，歴史上のどのような教訓を踏まえ，どのような目的を持ってつくられたか。

金本位制（金の一定量による通貨価値・通貨発行量の金による制約・兌換），金平価，金の偏在，管理通貨制度，大恐慌，輸出拡大の必要，為替（外国通貨との交換比率）切下げ競争，経済ブロック化，帝国主義戦争，為替相場の安定化要請，アメリカの絶対的優位（生産性・生産力・金保有高），ブレトン・ウッズ協定，ドルと金の交換，ドル平価，固定為替相場制，GATT，自由貿易，アメリカを中心とする輸出の拡大

14. EEC（欧州経済共同体）はどのような経済的目的で結成され，どのような施策を行ったか。

アメリカの従属からの脱却，アメリカ式重化学工業（電機・自動車・有機合成化学）の導入，大量生産，広大な共同市場，域内関税の撤廃，資金調達，資本の自由移動，労働力の自由移動，農業自給化政策，アメリカ資本の投下，域内貿易を中心とした経済成長

15. なぜアメリカは，IMF体制を自ら崩壊させざるを得なくなったのか。

ドルの流出，米系多国籍企業の海外投資，発展途上国（特に戦略的重点国）に対する経済・軍事援助の続行，ベトナム戦費，EEC・日本の競争力強化によるアメリカの輸出の伸び悩み，金の保有量を超えたドル債務，ドルと金との交換停止，ニクソン・ショック，変動為替相場制，為替レートの決定，通貨に対する需給関係，不安定な相場

2. 中3公民 開発教育授業案 (12時間)

1993年5月～6月

1. テーマ ① 多国籍企業と発展途上国における受け入れ
 2. 目標 先進工業国の企業が、発展途上国に経済進出する理由や、発展途上国がそれを受け入れざるをえない理由を理解させ、受け入れによって陥る困難な問題に気づかせる。
1. テーマ ② 発展途上国の貿易
 2. 目標 発展途上国の輸出や輸入の特徴を考察させ、貿易赤字の要因が先進工業国との特定の経済関係から生じていることを理解させる。
- | 学習項目 | 学習内容 |
|------------|--|
| 1 産業と輸出の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 植民地時代に強要されたモノカルチャー ○ 一次产品中心の輸出 <ul style="list-style-type: none"> 自然条件の影響 代替原料の登場 合成ゴム・合成繊維・プラスチック 供給過剰 |
| 2 受け入れの理由 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 資本過剰 ○ 資源の確保・支配 ○ 低賃金の利用 ○ 市場拡大 (現地販売・第三国輸出・逆輸入) ○ 公害防除負担の回避 ○ 途上国政府による便宜 (租税負担の軽減) ○ 植民地時代にゆがめられた産業構造 <ul style="list-style-type: none"> → 自立的産業構造の必要性 ○ 工業建設計画 <ul style="list-style-type: none"> 輸入代替工業化 輸出指向型工業化 ○ 工業建設のための資財の導入資金が不足 <ul style="list-style-type: none"> → 多国籍企業の受け入れ |
| 3 受け入れの影響 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 生産力の上昇 ○ 資源と富の収奪 ○ 経済主権の喪失 ○ 環境汚染 |
| 1 産業と輸出の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 工業建設のための技術や資財の導入 <ul style="list-style-type: none"> 資本財の輸入 高い生産集中度 → 管理価格 |
| 2 輸入の特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 工業建設のための技術や資財の導入 <ul style="list-style-type: none"> 資本財の輸入 高い生産集中度 → 管理価格 |
| 3 赤字の構造 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 交易条件 (輸出価格指数÷輸入価格指数) の悪化 <ul style="list-style-type: none"> * 石油ショック → 輸入価格の高騰・輸出の減退 |

1. テーマ ③ 資源ナショナリズム
2. 目 標 発展途上国の資源ナショナリズムが、どのような背景から進められていったのかを考察させ、どのような手段を用いて進められているかを理解させる。
1. テーマ ④ アグリビジネス
2. 目 標 アグリビジネスがどのような経営戦略で活動して来たかを理解させ、その行動が発展途上国に及ぼした影響に関心をもちさせる。

学 習 項 目	学 習 内 容	学 習 項 目	学 習 内 容
1 資源ナショナリズムの背景	○ メジヤの石油・銅などに対する採掘利権 → 先進国企業による資源と富の取奪	1 穀物メジヤの力	○ 世界穀物市場での支配力 ○ 公法 480号 (食糧援助計画) 人道的援助であると同時に、発展途上国の食生活を変化させ、食糧の対外依存を促進するねらい 小麦輸入と製粉の独占特権を握った例も → 伝統的農業の廃棄
2 発展途上国の主張と行動	○ 自国の資源に対する主権の主張 → 重要資源の国有化政策を実施 ○ OPECの結成 原油の国際カルテル (生産制限・価格協定) → 原油の4倍値上げ (石油ショック) ○ 銅等の生産国機構の結成	2 アグリビジネスの業分野と経営戦略	○ 農業生産部門 ○ 農業流通部門 ○ 農産物加工 ○ 農業生産財供給部門 ○ ハイブリッド種子 (高収量品種・一代雑種) 輸出用換金作物 肥料, 農薬, 農機具の供給 地場農園との契約生産 低賃金を利用した外資農園 = グローバルファーム・グローバルマーケット
3 先進工業国の対応	○ 技術や産業構造における省資源・省エネルギー化 ○ メジヤ・多国籍企業の巻き返し 北海油田の開発 → OPECのシェアの低下 チリのクーデター → 国有化の妨害		

1. テーマ ⑤ 緑の革命

2. 目標 緑の革命が発展途上国の農業や農民に与えた影響を理解させ、伝統的社会を変容させていることに気づかせる。

1. テーマ ⑥ 日本のODA

2. 目標 日本のODAがどのような役割を果たしているかを考えさせ、発展途上国から指摘されている問題点や日本への期待に気づかせる。

学 習 項 目	学 習 内 容	学 習 項 目	学 習 内 容
1 生産力への影響	○ 高収量品種で生産力の上昇 → 食糧自給が可能になった国も	1 政府開発援助の規模と援助先	○ 1兆7000億円（世界一の援助額） アジアの国々へ集中 ↔ 日本企業の進出との関係 LLDCよりもアメリカの重要視する国 国民への情報公開がない、(国民の税金)
2 生産費への影響	○ 肥料、農薬、農機具多用で生産費の上昇 高い小作料を払う多数の小作農 小規模農家の高利の借入金経営	2 ODAの中の贈与	○ 低い贈与（無償援助・技術援助）比率 ○ 使途の自由度 日本のコンサルタント会社を通じた “ヒキつき”援助（日本企業への発注）
3 農民層の分層	○ 没落（←生産費の増大による取り分りの減少で） 土地なし農民 → 回復力のない焼き畑の拡大 → 都市への大量で急激な移住、都市のスラム化	3 ODAの中の借款	○ 円借款 インフラストラクチャー関連の大規模開発 住民の生活の場の喪失 ダム建設による水没で立ち退きを迫られる例 環境アセスメントの不十分さ → 環境破壊 現地の一部富裕層と日本企業との共同利益
4 ますます豊かになる勢力	○ 肥沃な土地をもち、土地を独占する小地主 政府による地主への低利融資 ○ アグリビジネス・地主・商人・金融機関 小規模農家に融資 → 収入と土地の集中	4 現地の住民に貸付と援助に	○ 現地の住民に合意なし → 現地研究者との共同の調査・研究機関の必要

1. テーマ ⑦ 債務の累積と経済困難
2. 目標 発展途上国の累積債務が増大して来た理由を理解させ、膨大な累積債務によって陥った経済困難に気づかせる。

学習項目	学習内容
1 債務の背景と債務増大の理由	<ul style="list-style-type: none"> ○ 経常収支の赤字 ○ 輸入資金不足 → 資本財輸入のための債務 ○ 低利の公的資金（政府開発援助・IMF融資）からの借入量的限度 → 高利の多国籍銀行からの融資 * アメリカの高金利政策で一層の高利に → 返済額（元本と利子）の増大
2 債務の規模と返済の停滞	<ul style="list-style-type: none"> ○ デット・サービス・レシオ（元利返済額÷輸出額比率）高まる ○ リスケージュールディング（債務返済繰延べ） ○ デフォルト・モラトリアム（債務返済不履行）
3 多国籍銀行の対応と資金の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多国籍銀行からの新規資金の激減 → 資本逃避（流入を上回る資金の流出） ○ 建設上の資金の停止 → 経済成長への打撃

1. テーマ ⑧ IMFコンディショナリティ
2. 目標 IMFが債務返済の遅延や新借融資の要求に応じる条件として発展途上国に迫った経済政策を理解させ、その実施が経済に与えた影響に気づかせる。

学習項目	学習内容
1 返済の停滞に対するIMF（先進工業国総意）の対応	<ul style="list-style-type: none"> ○ 多国籍銀行の経営危機の打開 → 返済のために発展途上国の貿易黒字化をねらう
2 「調整」条件	<ul style="list-style-type: none"> ○ 輸入の削減 ○ 緊縮財政（財政赤字の削減） 公共事業・社会保障の抑制 ○ 公共料金の引き上げ・増税 ○ インフレ（輸出を減少させる働き）抑制 ○ 為替の切下げ ○ 賃金抑制
3 「調整」条件実施の経済的・社会的結果	<ul style="list-style-type: none"> ○ 資本材の輸入減少 ↓ ○ 政府資金の減少 → 企業活動の減退、倒産・失業増 ○ 消費購買力の低下 ↓ → 「失われた10年」 ○ 途上国の国民を犠牲にした借金の取立て → ストライキ・暴動 → 警察・軍隊との衝突
4 発展途上国の言い分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 貿易の黒字幅や経済成長率に応じた返済を！

1. テーマ ⑩ 発展途上国の国内対立
2. 目標 発展途上国の支配層がその政治支配を維持するためにどのような政策を採っているかを考えさせ、民衆がこの政策にどのようにに対応しているかに気づかせる。

学習項目	学習内容
1 政府を支える勢力	○ 大地主・大資本家の権力の維持 ○ 軍部の政權への干渉 ○ アメリカ (CIA) の介入と支援の例も
2 「失われた10年」と国民生活	○ 貧富の格差の拡大 → 民衆の生活苦 → 土地改革要求 → 反体制的・反政府的運動
3 国内対立の様相	○ 軍事政權 ←→ 民政移管 テロテロの多発 反米闘争
4 支配層の政策	○ 軍隊と警察力の強化 軍事費増強 兵器輸入増 ○ 閉発独裁の例 人権抑圧

1. テーマ ⑨ 新国際経済秩序
2. 目標 新しい国際経済秩序 (NIEO) の樹立が、発展途上国から叫ばれるようになっ
た理由をこれまでの学習から考えさせ、新しい秩序として主張されている原則を
理解させる。

学習項目	学習内容
1 IMF・GATT体制の意味	○ 自由・平等・無差別＝市場経済の中の強者の論理 → 南北格差の拡大
2 UNCTADの結成	○ 南北間の支配従属関係の是正がねらい 援助よりも貿易を！
3 新国際経済秩序樹立に関する宣言 (国連資源特別総会)	○ 天然資源に対する恒久主権 ○ 多国籍企業の規制 ○ 交易条件の改善 市場拡大のための一般特惠 ○ GNPの1%援助を！ ○ ヒモの付かない公的資金援助を！

1. テーマ ① 発展途上国の軍事負担
 2. 目標 発展途上国の軍事負担の増大が国内でどのような問題をもたらしているかを理解させ、近隣諸国や国際的紛争の火種となっていることに気づかせる。
1. テーマ ② 非同盟主義国の国際的役割
 2. 目標 発展途上諸国が冷戦構造の中で、国連の場を中心にどのような外交行動を採ってきたかを理解させ、平和への貢献について考えさせる。

学習項目	学習内容	学習項目	学習内容
1 大量の武器輸入・軍事費増強の背景	<ul style="list-style-type: none"> ○ 軍事独裁政権の人権抑圧 ○ 革命やテロターの子防 × アフリカの武器援助の打ち切り 	1 非同盟主義	<ul style="list-style-type: none"> ○ 民族解放運動の支持 ○ ミソの軍事同盟への不参加 ○ 外国への軍事基地の非賛与
2 軍事費膨張がもたらすもの	<ul style="list-style-type: none"> ○ 軍事的債務の増大 ↓ ○ 国債増発 ↓ → 外国への利子返済増 ○ インフレ → 輸出競争力低下、債務の累積 ○ 福祉や教育予算の削減 	2 非同盟諸国首脳会議と国連軍縮特別総会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 核兵器廃絶の国連決議と国際世論の形成 ○ 核抑止論批判による核軍拡への抵抗
3 紛争の火種	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内紛争の激化 ○ 不満のほけ口 → 近隣との紛争 	3 軍縮の必要性(発展途上国を含む全ての国々にとっても)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 先進工業国における軍事費とGDPの関係 逆相関 ○ 国連による軍拡と経済成長のシミュレーション 経済は軍拡により停滞し、軍縮により成長する ○ 軍拡による設備投資の機会と規模の縮小 → 経済成長率の低下 → 社会保障・教育費用の削減 → 発展途上国の貧困と飢えの克服を困難に!
4 紛争の国際化	<ul style="list-style-type: none"> ○ ミソの介入で構造的国際紛争に → 軍縮・平和の必要 		

3. 発展途上国の開発に関するアンケート結果の分析

資料1の1から40までの問いに対する回答から、生徒のこの問題に関する意識と授業による変容を分析する。開発教育の授業の前後に実施したプリ・テストとポスト・テストの問いは同じである。資料2参照。

1. 「開発の中心が経済開発にあること、開発の目標が物質的に豊かなくらしができるようになること」という考え方に対し、事前に、肯定的な回答をしている生徒の割合（①「そう思う」と、②「それに近い」を合計した数字）は49.6%、否定的なもの（⑤「そうは思わない」と④「少し違う」）は42.0%であった。授業後の回答では、肯定的なものは55.5%に増え、否定的なものは30.8%に減った。
2. 上記1とは異なる考え方「開発の目標は自分の可能性を発揮することであり、経済開発はそのための手段」という考え方に対しては、プリ・テストでは肯定的なもの53.8%、否定的なもの24.3%であった。ポスト・テストでも変容が見られない。これは、開発と自分の可能性の発揮に直接関連する教材を提示しなかったためであろう。
3. 経済開発のためには、「先進資本主義国の経験に習って、工業化を進めることが必要」という考え方に対しては、肯定的なもの32.0%、否定的なもの49.5%であったが、事後には否定的なものが36.7%に減り、③「どちらともいえない」が17.6%から28.2%に増えている。これは、先進資本主義国の経験に問題が多いことを感じ、何か別の方法を期待していた生徒が、問題が多くてもそれに習わざるを得ない発展途上国の事情を洞察した結果生じた葛藤ではないかと思われる。
4. 「開発を進める方法は、それぞれの国固有の歴史的・経済的事情に合うものでなければならない」という当為的な考え方に対しては、事前に90.7%の生徒が肯定的な答えをしている。事後においてもこの傾向は変わらない。
5. 「経済開発の際に先進資本主義国からの援助に頼ることは、支配・従属の関係を生むことが多く、危険」という考え方に対しては、事前では、肯定的なもの51.2%、否定的なもの31.9%だったが、事後には否定が15.4%に減り、反対に肯定が70.1%に増え、特に明確な肯定的意見である①「そう思う」は21.8%から35.9%に増えている。援助に頼った結果陥る深刻な事態が、この授業を通して理解されたためと思われる。

6. 開発の主体は誰かの間、「開発は政府によって計画され、政府によって行われるべき」という考え方に対しては、事前では、肯定的なものが23.6%、否定的なものが48.7%で、事後の変化は見られない。
7. 上記6とは対立する開発主体に対する考え方「開発は住民の自主的計画・自発的参加によって行われるべき」に対しては、事前では、肯定的なもの49.6%、否定的なもの24.4%。事後には、肯定が64.9%に増え、否定は17.9%に減っている。特に、①の「そう思う」は21.0%から35.0%に増えている。ダムの建設による先住民の追い出しなどの問題を学習したことによるものと思われる。
8. 開発の主体を「政治家・官僚・経営者など国の指導的地位にいる人たち」に期待する意見は、事前も事後もわずかで、20%程度である。
9. 「工業化による経済開発は、国民全体に利益をもたらす」という考え方に対して、事前では、肯定18.4%、否定55.5%であったが、事後には否定的意見は69.2%に増えている。
10. 上記9とは対立する「工業化による経済開発は、国民の間に貧富の差を生み出す」という考え方に対しては、事前では、肯定が74.0%、否定が11.1%。既にマスコミを通し、また、中学校では地理の授業を通して、発展途上国の工業化開発が国民全体の利益になっていないことを生徒たちは学んでいたのであろう。事後は肯定が82.9%に増えている。積極的肯定の①も37.0%から47.0%に増えている。
11. 「開発は市場経済の原理・利潤追求の原理によって行われるべき」という資本の論理そのままの開発の理念に対しては、事前では、肯定が30.3%、否定が45.4%。事後の変化は見られない。
12. 上記11と対立する「開発は恵まれていない住民の必要を満たすことを中心に行われるべき」という理念に対しては、事前では、肯定が61.3%、否定が22.7%。事後では、否定が12.8%に減り、肯定は71.0%に増えている。支配層など一部上層部への富の集中と、多くの農民の没落や労働者の失業・低賃金という現実を学ぶことによって、この理念の必要を確信するものが増えたと考えられる。
13. 経済開発と自然環境破壊の矛盾の中で、「開発によって自然環境が破壊されることはやむをえない」という考え方に肯定的なものはわずかで16.8%、否定的なものはきわめて多く78.2%

に達していた。事後でも、否定が79.5%で、変化は見られない。開発と環境悪化の関係についての詳しい授業展開をしなかったことや、始めから否定派が多かったことによるものと考えられる。

14. 上記13に対立する「生産の伸びが遅くても、開発は生態系をそこなわない範囲で行うべき」という考え方に対しては、事前では、肯定が77.3%、否定が14.3%で、反対側から問うても同じ結果が出ている。事後では、肯定が80.3%で、特に変化は見られない。
15. 開発と人権侵害との矛盾の具体例を挙げ、いずれを重視するか問うてみた。「先住民には、暮らしを守る権利があり、ダムの建設がそれを奪うような場合には、作業を中止すべき」という考え方に対しては、事前では、肯定が58.8%、否定が16.0%で人権に軍配をあげる者が多かった。事後でも、肯定が61.5%で、特段の変化は見られない。
16. 開発とは西欧化でなければならないのか。「開発を実現するためには、発展途上国の伝統的な価値観や行動様式を、近代的・西欧的なものに変革することが必要」という考え方に対しては、事前では、肯定するものは11.8%と少なく、否定的なものが79.0%に達している。事後の変化は見られない。
17. 上記16を反対側から問うた「開発は、発展途上国固有の伝統的文化を重んじて行うことが必要」という考え方に対して、事前では、肯定派が73.1%、否定派が11.7%となっていて、同じ結果が出ている。事後の変化は見られない。
18. 南北問題を如何なる方法で解決するか。「先進・発展途上という国際社会の格差の構造を変えるためには、先進資本主義国からの企業の受け入れや政府開発援助が必要」という考え方に対して、事前では、肯定派が45.4%、否定派が29.4%。事後には、肯定派が50.4%になっているが、きわだった変化は見られない。企業進出や援助に危険が伴うことは分かったが、それなしに格差を埋めることはできないという葛藤のあらわれと見られる。「どちらともいえない」が事前とほとんど変わらぬ23.9%である。
19. 南北問題を発展途上国主導で打開する方法「格差の構造を変えるためには、貿易の不利の是正や多国籍企業に対する規制が必要」という考え方に対しては、事前では、肯定派が57.1%、否定派が17.6%。事後には、肯定派が非常に増えて82.9%に達した。「そう思う」と答えている確信的肯定派は、事前の21.8%から48.7%に増えている。これは、交易条件の悪化や多国籍企業の横暴を学習したことによる変化と考えられる。

20. 援助してもらうのだからヒモつき援助でもやむを得ないのか。「援助で受け取った資金は、援助した国の企業の製品を買うようにしぼられることなく、自由に使えるようにする必要がある」という考え方に対して、事前では、自由使用をよしとするものがきわめて多く84.0%、ヒモつきやむを得ずとするものはわずかに8.4%。事後の変化は見られない。ヒモつき援助の不当さを学習するまでもなく、先進工業国本位の援助に批判的な生徒が多かったためであろう。

21. 援助する側の国民が援助について意見を反映しなくてよいのか。「政府開発援助資金の元は税金だから、援助に関する情報は先進資本主義国の国民に公開されなければならない」という考え方に対して、事前では、肯定派が89.9%、否定派が3.3%。事後のきわだった変化は見られない。日本の場合を例に、事前に公開されず、意見の反映ができない実態を学習したが、納税者の権利については、始めから、きわめて多くの生徒が認めていたためであろう。

22. 援助の主体は政府だけか。「先進資本主義国からの援助は、政府によって行われるだけでなく、市民団体によっても行われるべき」という考え方に対して、事前では、肯定派が77.3%、否定派が11.1%。事後の肯定派は78.7%で、数量的にはさしたる変化は見られないが、「そう思う」と答える確信的肯定派は、事前の41.2%から49.6%に増えている。政府だけに任せておくわけにはいかない、自分たちでできることがあればしてみたいという気持ちが強まったものと見られる。

23. 企業進出の理由を述べた「先進資本主義国の企業が発展途上国に経済進出するのは、低賃金を利用したり、資源を手に入れたりして、利潤をふやしたいから」という考え方に対して、事前の段階から、肯定するものが非常に多く92.4%、確信している「そう思う」も65.5%に達している。否定するものはわずか5.1%にすぎない。始めから、疑い得ない事実としてほとんどの生徒に認識されていて、事後でもこの傾向に変化はない。

24. 多国籍企業受け入れの背景と理由を述べた「発展途上国が先進資本主義国企業の経済進出を受け入れるのは、植民地時代にゆがめられた産業構造を、自立的なものに変えたいから」という考え方に対して、事前では、肯定が31.1%、否定が44.6%であった。事後には肯定するものが著しく増えて86.3%に、否定も激減して5.1%となった。確信的な「そう思う」も激増して事前の7.6%から54.7%になった。発展途上国は昔から貧しかったと思っていた生徒が相当いて、かれらが、植民地時代に宗主国から収奪され産業構造もゆがめられた歴史的事実を学んだためと思われる。

25. 企業進出の途上国への影響を述べた「経済進出を受け入れた結果、発展途上国では伝統的工

業と農村の破壊が急激に進み、人々のくらしと生きていく権利がおびやかされている」という考え方に対しては、事前では、肯定するものが71.4%、否定するものが11.8%。事後には、肯定が85.5%に達し、また、確信的な「そう思う」も事前の26.9%から51.3%に増えた。これも事実認識の学習を通じた変化と考えられる。

26. 企業進出のもう一つのマイナスの影響を述べた「経済進出を受け入れた結果、先進資本主義国の公害が輸出されるなど、発展途上国の環境が汚染され、健康被害が広がっている」という考え方に対しては、事前では、肯定派が87.4%、否定派が5.8%。事後には、肯定が90.6%になったが、始めから常識ができあがっていて、量的にはさしたる変化は見られない。ただ、「そう思う」は事前の52.9%から70.9%に増えていて、事実の学習を通して質的認識が深まったものと思われる。

27. 工業化のねらいや進め方を述べた「発展途上国の工業化は、輸入品を国内でつくれるようにしたり、輸出向けのもをつくったりして、貿易の赤字を解決しようとするねらいをもつ」という考え方に対しては、事前では、肯定派が67.3%、否定派が16.8%。事後には肯定が87.2%に増え、否定は5.1%に減った。「そう思う」という確信的な答えも事前の24.4%から57.3%に増えた。輸入代替工業化や輸出指向型工業化などの工業化のタイプを学習したためと思われる。

28. 途上国の貿易赤字の原因について述べた「発展途上国の貿易赤字は、主な輸出品が価格の不安定な一次産品で、主な輸入品が先進資本主義国からの割高な生産設備であることに原因がある」という考え方に対しては、事前で既に、肯定派が79.8%に達していて、否定派は5.9%とわずかである。事後の肯定は88.0%に増えた。確信的な見方「そう思う」も、事前の36.1%から67.5%に増えている。これは、途上国の赤字の原因を輸出入の双方から分析的に学習したことによって得られた確信であろう。

29. 自らの首をしめることになる借金をなぜするのか。「発展途上国が借入金などの経済援助を受け入れるのは、貿易赤字のもとでも工業建設を進めようとするからである」という考えかたに対して、事前では、肯定派が68.0%、否定派が14.3%。事後には、肯定が85.5%に増えた。「そう思う」も事前の31.9%から64.1%に激増している。この認識の深まりも、途上国の工業化への必死の思いを、学習を通して受け止めたためと思われる。

30. 債務累積の原因について述べた「発展途上国の債務が増えるのは、利子が低く返す期間の長い政府開発援助が少なく、利子の高い多国籍銀行からの借入金が多いからである」という考え方に対して、事前では、肯定が33.6%、否定が17.7%、「どちらともいえない」がもっとも多

く37.0%であった。事後には、肯定が84.6%に激増し、否定と「どちらともいえない」はわずかとなった。また、確信的な肯定「そう思う」は、事前の10.9%から64.1%に増えている。生徒は、債務の累積については知っていたが、その原因を学習しなかったのであろう。この授業を通してはじめて、ODAやIMFなどの公的な援助、その内訳としての贈与や借款、多国籍銀行からの融資などを学んだため、大きな変容が生じたものと思われる。

31. 債務が増えれば返済が滞るという常識的な考え方「債務が増えた結果、発展途上国では輸出額と比べた返済額の割合が大きくなり、返済がどこおる国が多くなっている」に対しては、事前の段階から肯定が84.9%、確信的な肯定も45.4%であった。事後には、それぞれ91.5%、77.8%に増えている。デット・サービス・レンオヤリスケジュールリング、それにモラトリアムなどの事実学習を通じて確信的肯定に至ったものと思われる。

32. 途上国からの資金流出という深刻な事態を捉えているか。「債務が増えた結果、援助で発展途上国に流入する資金よりも、返済などで流出する資金の方が多くなり、途上国の資金不足は深刻となっている」ということを、事前の段階で肯定するもの70.6%、否定するもの9.3%。事後には、87.7%に増えた。「そう思う」者も、事前の38.7%から70.9%に激増した。これも事実学習を踏まえて確信となったものと思われる。

33. 返済とIMFの関係を捉えているかを見る設問。「返済が滞る発展途上国に対して先進資本主義国は、IMFを通じ、輸入を減らし、財政の規模や賃金を抑えて、返済を急ぐよう迫っている」という事実に対して、事前では、肯定は少なく24.4%、否定が31.1%、「どちらともいえない」が30.3%であった。事後には、肯定が激増し、82.1%に達した。確信的肯定も事前の12.6%から59.0%に増えた。IMFの果たしている役割については、学習の機会がなかったのであろう。IMFが先進資本主義国の利益の立場から、途上国の要求、リスケジュールリングや新規融資を受け入れるための条件として提示し、実施させた「調整条件」の学習が変化の要因と思われる。

34. 「発展途上国は、貿易赤字を解決しようとして、伝統的農業を犠牲にし、輸出用換金作物に転換したところが多い」という考え方に対しては、事前の段階から既に肯定が82.4%に達していた。中2までの地理の授業の影響と思われる。

35. 緑の革命の影響について述べた「緑の革命」（収量の多い種子への転換）は、大地主やアグリビジネスの利潤を増大させたが、多くの小作農を借金で苦しませ、土地から切り離す結果を招いている」という考え方に対しても、事前の段階から既に肯定が84.9%に達している。これ

も地理の授業の影響と考えられる。事後には、肯定は90.6%に増えた。確信的肯定も事前の56.3%から82.1%に激増している。事実学習を積み重ねたことによる確信の広がりと考えられる。

36. 軍事独裁を捉えているかを見る設問。「発展途上国の農民や労働者は土地改革や労働条件の向上を求めているが、支配層はそれを抑えるために、軍事的な独裁体制をしいて人権無視の政治を行う場合が多い」という考え方に対して、事前では、肯定が63.0%、否定が16.8%。事後には、肯定が83.7%に増え、確信的肯定も29.4%から50.4%に増えた。確信的肯定が半数程度にとどまったのは、途上国のすべてが軍事独裁体制を布いて人権侵害を行っているわけではなく、また、特定の国を例にとった学習ではなかったため、印象が薄かったのかもしれない。

37. 武器輸入のマイナスの影響を捉えているかを問う設問。「発展途上国の大量の武器輸入は、経済建設や福祉水準の向上を妨げる結果をもたらしている」という考え方に対しては、事前では、肯定が79.0%、否定が10.1%。事後には、肯定が89.7%に増え、確信的肯定も51.3%から71.8%に増えている。軍事費負担の重荷を学習した効果と考えられる。

38. 発展途上国の内部対立と国際紛争の関係を捉えているかを問う設問。「発展途上国内部の激しい対立は、大国の武力介入をまねき、国際紛争の火ダネとなっている」という考え方に対しては、事前の段階で既に、肯定が83.2%に達している。地理の授業で既習だったようである。構造的国際紛争の学習をし、事後に肯定は88.0%になった。

39. 資源ナショナリズムの歴史的背景が捉えられているかを問う設問。「資源に対する主権という発展途上国の主張は、先進資本主義国企業による資源と富の収奪に対する抵抗である」という考え方に対しては、事前では、肯定が59.7%、否定が16.0%。事後には、肯定が88.9%に増えた。確信的肯定も、事前の22.7%から67.5%に激増している。歴史的事実の学習の重要性を物語っている。

40. 戦後の国際通貨制度や貿易体制の途上国にとっての意味が捉えられているかどうかを問う設問。「IMF・GATTの自由・無差別の貿易体制は、先進資本主義国に有利な国際経済のしくみである」という考え方に対しては、事前の段階から既に、肯定が80.7%、否定が10.1%。IMF・GATT体制については、開発教育の授業に入る数時間前に公民で学習したところである。事後に、肯定が90.6%に増え、また、確信的な肯定が60.5%から66.7%に増えているのは、IMFコンディショナリティーの学習が影響したものと思われる。

4. 授業後の変容（資料3の感想文より）

1. 「発展途上国について自分の考え方が変わった、と感じるようなことがあれば、書いてください。」という問いに対して、個々人の感想とその表現は後ろの資料にあるように多様である。しかし、変容の方向として明確に読み取れる部分がある。その主なものを挙げてみよう。発展途上国の貧しさの原因が、以前は途上国の人たちの努力不足やその政府の無能さにあると思っていたが、授業の後では、むしろ多国籍企業による収奪や先進資本主義国政府の政策にあると思うようになったという主旨の感想がもっとも多く、117人の回答者の中で50人程いる。「開発教育」のねらいは、発展途上国の諸問題を先進資本主義国との関係において捉えられるようにすることであるから、この授業案が一定の成果を上げたという評価をすることができよう。

なお、上記のことと関連して、一面的に先進国を断罪するのではなく、途上国の姿勢を特に問題視しているものもあり、途上国政府と民衆の間に対立の構造があることにはじめて気づき、また、債務を累積させてまで武器を輸入して、開発独裁で人権をないがしろにし、福祉や教育を犠牲にしている途上国政府の責任を追求しているものも10人程いる。「開発教育」は、途上国の内部問題に踏み込むことを不可欠としているが、授業時間の当て方がやや不足していたかもしれない。

次いで、変容の方向として目立つのは、多国籍企業や先進国政府に経済的にやられっぱなしで、外交・軍事でも先進国に従属させられていて、無法者に何の抵抗もできない無力な途上国という、同情とさげすみの気持ちで見ていたものが、途上国が必死で先進国に追いつく努力をしていること、また、結束して非同盟運動やUNCTADの結成・新国際経済秩序宣言などで先進国に反撃していることを知って共感を覚えるようになったものが20人程いることである。虐げられているものの解放のための闘いは、あきらめかけていた生徒の正義感を鼓舞するであろう。富めるもの、強きものによる自己の利益のための“慈善”的救済に、生徒たちの正義感はずいぶん懐疑の念を抱いていたようである。途上国の人たち自身の解放の努力と先進国の若者たちの問題解決への態度育成との結合、これは「開発教育」のもうひとつの大切なねらいである。117人から上記の50人程を除いた60数人の中の20という数字は見逃ごせない。担当者は、これも授業の成果のひとつと考えている。

2. 「特に興味をもったところがあれば、書いてください。」という問いに対して、ないというものは9人である。集中しているものとしては、アグリビジネスの経営戦略や緑の革命の影響を挙げるもの21人、途上国の軍拡や政府と民衆の対立を挙げるもの18人、ODA（とくに日本の）を挙げるもの18人となっている。以下、債務問題が8人、NIEOが6人、IMFコンディショナリティーが5人と続いている。

アグリビジネスについては、そのグローバル・フーム、グローバル・マーケット戦略のす

さまじさと、それが途上国に与えた深刻な影響が、南北の支配・従属関係を象徴するものとして、心に残ったということであろう。途上国の軍拡は、非同盟運動が掲げる理念との矛盾において、また、援助のムダ使いとして許しがたく心に引っ懸かるということであり、民衆と政府との対立はこれまた、途上国政府が民主主義を踏みにじて民衆を苦悩させていることに対する憤りであろう。日本のODAは、日本政府による途上国本位ではなく、日本企業の儲け優先の援助を知ること、日本人であることの誇りを傷つけられた落胆と怒りの現れであろう。

3. 「疑問に思ったことがあれば、書いてください。」という問いに対して、ないというもの34人。特に集中しているものはない。南北問題は打開することができないのではないかと懸念、政府と民衆の対立は冷戦後も続いていくのかといった見通しの問題などが表明されている。

4. 「もっと知りたいことがあれば、書いてください。」という問いに対して、ないというもの21人。残りは多様に散っている。やや集中しているものは、途上国の軍拡や政府と民衆の対立を挙げるもので、18人。次いで、南北問題の解決策や解決の見通し、NIEOの動きなどを挙げるものが10人、ODAが8人である。興味をもったことや疑問に思ったことと重なっている。

5. 「面白くなかったことがあれば、書いてください。」という問いに対して、ないというもの38人。回答の中でやや目立つものとしては、アメリカや日本などに特に批判的で、先進国を悪者扱いしているという授業の立場に対する批判が7人あった。授業の終盤に、話しの速度が早くなったことについて不満を述べているものもいる。12時間の授業の内に、学習事項を詰め込みすぎたことはいなめない。

なお、発展途上国の環境問題に関する授業は、先進工業国との係わりや先進工業国独自の環境問題も含めた地球規模の問題として、2学期に展開する予定である。ここでは、アンケートの集計結果等について言及しないことにする。

(中3公民「開発教育」担当 林 幹一郎)

資料 1 — アンケート —

発展途上国の開発、先進資本主義国からの

援助・企業進出、環境などに関するアンケート

1983. 5. 29

あなたは、次の1から50までの考え方をどう思いますか。

- ① 「そう思う」ときは
- ② 「それに近い」ときは
- ③ 「どちらともいえない」ときは
- ④ 「少し違う」ときは
- ⑤ 「そうは思わない」ときは

に、○印を付けて答えて下さい。

1. 開発の中心は経済開発にあり、開発の目標はそれぞれの国の人々が物質的に豊かなくならしげでできるようになることにある。

- ① ② ③ ④ ⑤

2. 開発の目標は、一人ひとりの人が自分の可能性を發揮することであり、経済開発はそのための一つの手段である。

- ① ② ③ ④ ⑤

3. 経済開発のためには、先進資本主義国の経験に習って、工業化を進めることが必要である。

- ① ② ③ ④ ⑤

4. どの産業に重点をおくかなど、開発を進める方法は、それぞれの国固有の歴史的・経済的事實に合うものでなければならぬ。

- ① ② ③ ④ ⑤

5. 経済開発の際に先進資本主義国からの援助に頼ることは、支配・従属の関係を生むことが多い、危険である。

- ① ② ③ ④ ⑤

6. 開発は、国を代表する政府によって計画され、政府によって行われるべきである。

- ① ② ③ ④ ⑤

7. 一つの国の中には異なった階層の人々がいるので、開発は、住民の自主的計画・自発的参加によって行われるべきである。

- ① ② ③ ④ ⑤

8. 開発は、政治家・官僚・経営者など国の指導的地位にいる人たちによって進められるべきである。

- ① ② ③ ④ ⑤

9. 工業化による経済開発は、国民全体に利益をもたらす。

- ① ② ③ ④ ⑤

10. 工業化による経済開発は、国民の間に貧富の差を生み出す。

- ① ② ③ ④ ⑤

11. 開発は、市場経済の原理・利潤追求の原理によって行われるべきである。

- ① ② ③ ④ ⑤

12. 開発は、恵まれていない住民の必要を満たすことを中心に行われるべきである。
- ① ② ③ ④ ⑤
13. 経済開発によって、自然環境が破壊されることはやむをえない。
- ① ② ③ ④ ⑤
14. 人間は生態系の中に住むのだから、たとえ生産の伸びが遅くても、開発は生態系をそこなわない範囲で行うべきである。
- ① ② ③ ④ ⑤
15. 先住民にはくらしを守る権利があり、ダムの建設がそれを奪うような場合には、作業を中止すべきである。
- ① ② ③ ④ ⑤
16. 開発を実現するためには、発展途上国の伝統的な価値観や行動様式を、近代的・西欧的なものに革新することが必要である。
- ① ② ③ ④ ⑤
17. 開発は、発展途上国固有の伝統的文化を重んじて行うことが必要である。
- ① ② ③ ④ ⑤
18. 先進・発展途上という国際社会の格差の構造を変えるためには、先進資本主義国からの企業の受け入れや政府開発援助が必要である。
- ① ② ③ ④ ⑤
19. 先進・発展途上という国際社会の格差の構造を変えるためには、貿易の不利の是正や多国籍企業に対する規制が必要である。
- ① ② ③ ④ ⑤
20. 援助で受け取った資金は、援助した国の企業の製品を買いようにしにらられることなく、自由に使えるようにする必要がある。
- ① ② ③ ④ ⑤
21. 政府開発援助資金の元は税金だから、援助に関する情報は先進資本主義国の国民に公開されなければならぬ。
- ① ② ③ ④ ⑤
22. 先進資本主義国からの援助は、政府によって行われるだけでなく、市民団体によっても行われるべきである。
- ① ② ③ ④ ⑤
23. 先進資本主義国の企業が発展途上国に経済進出するのは、低賃金を利用したり、資源を手に入れたりして、利潤をふやしたいからである。
- ① ② ③ ④ ⑤
24. 発展途上国が先進資本主義国企業の経済進出を受け入れるのは、植民地時代にゆがめられた産業構造を、自立的なものに変えたいからである。
- ① ② ③ ④ ⑤

31. 債務が増えた結果、発展途上国では輸出額と比べた返済額の割合が大きくなり、返済がとどおる国が多くなっている。
① ② ③ ④ ⑤
32. 債務が増えた結果、援助で発展途上国に流入する資金よりも、返済などで流出する資金の方が多くなり、途上国の資金不足は深刻となっている。
① ② ③ ④ ⑤
33. 返済がとどおる発展途上国に対して先進資本主義国は、IMFを通じ、輸入を減らし、財政の規模や賃金を抑えて、返済を急ぐよう迫っている。
① ② ③ ④ ⑤
34. 発展途上国は、貿易赤字を解決しようとして、伝統的農業を犠牲にし、輸出入換金作物に転換したところが多い。
① ② ③ ④ ⑤
35. “緑の革命”(収量の多い種子への転換)は、大地主やアグリビジネスの利潤を増大させたが、多くの小作農を借金で苦しめ、土地から切り離す結果を招いている。
① ② ③ ④ ⑤
36. 発展途上国の農民や労働者は土地改革や労働条件の向上を求めているが、支配層はそれを抑えるために、軍事的独裁体制をして人権無視の政治を行う場合が多い。
① ② ③ ④ ⑤
37. 発展途上国の大量の武器輸入は、経済建設や福祉水準の向上を妨げる結果をもたらしている。
① ② ③ ④ ⑤

25. 経済進出を受け入れた結果、発展途上国では伝統的工業と農村の破壊が急激に進み、人々のくらしと生きていく権利がおびやかされている。
① ② ③ ④ ⑤
26. 経済進出を受け入れた結果、先進資本主義国の公害が輸出されるなど、発展途上国の環境が汚染され、健康被害が広がっている。
① ② ③ ④ ⑤
27. 発展途上国の工業化は、輸入品を国内でつくれるようにしたり、輸出向けのものをつくりたりして、貿易の赤字を解決しようとするねらいをもつ。
① ② ③ ④ ⑤
28. 発展途上国の貿易赤字は、主な輸出品が価格の不安定な一次産品で、主な輸入品が先進資本主義国からの割高な生産設備であることに原因がある。
① ② ③ ④ ⑤
29. 発展途上国が借入金などの経済援助を受け入れるのは、貿易赤字のもとでも工業建設を進めようとするからである。
① ② ③ ④ ⑤
30. 発展途上国の債務が増えるのは、利子が低く返済期間の長い政府開発援助が少なく、利子の高い多国籍銀行からの借入金が多いからである。
① ② ③ ④ ⑤

38. 発展途上国内部の激しい対立は、大国の武力介入をまねき、国際紛争の火タネとなっている。

① ② ③ ④ ⑤

39. 「資源に対する主権」という発展途上国の主張は、先進資本主義国企業による資源と富の収奪に対する抵抗である。

① ② ③ ④ ⑤

40. IMF・GATTの自由・無差別の貿易体制は、先進資本主義国に有利な国際経済のしくみである。

① ② ③ ④ ⑤

41. 企業は環境破壊に主な責任を負っている。

① ② ③ ④ ⑤

42. 環境は、特定の国や企業のみならず、すべての人の共有財産である。

① ② ③ ④ ⑤

43. 企業は次世代の人々が生存するのに必要なものを手に入れる権利を侵害してはならない。

① ② ③ ④ ⑤

44. 森林消滅の主な原因は、先進資本主義国からの開発援助であるよりも、発展途上国自身の人口増加にある。

① ② ③ ④ ⑤

45. 環境を汚染した者は、自らそれを元に戻すための負担をしなければならない。

① ② ③ ④ ⑤

46. 先進資本主義国も発展途上国も現在の生産構造を、環境破壊をもたらさないものに変えて行く必要がある。

① ② ③ ④ ⑤

47. どの国でも、開発の際には、環境への影響評価が公開されて、住民の意志によって修正あるいは中止されることが保障されなければならない。

① ② ③ ④ ⑤

48. 水保病・航空騒音などの公害被害者は、長い裁判を続けることなく、早急に救済されなければならない。

① ② ③ ④ ⑤

49. 公害による被害の立証に関しては、被害者の立証は簡略で、加害者の反論の立証は厳密でなければならない。

① ② ③ ④ ⑤

50. 公害の発生や環境悪化を予防するためには、企業活動や開発行為の中止を請求する権利が国民に保障される必要がある。

① ② ③ ④ ⑤

資料2 — 開発教育アンケート回答集計表 —

開発教育アンケート回答集計表

- ・プリ・テストは5月29日、ポスト・テストは7月3日実施。
- ・選択肢番号の上段はプリ・テスト、下段はポスト・テスト。
- ・回答者数は、プリ・テスト119名、ポスト・テスト117名。
- ・それぞれの上下の括弧のない数は実数、括弧のある数は%。

質問番号	①	②	③	④	⑤	6	9	19	33	30	28
1	19 (16.0)	40 (33.6)	10 (8.4)	33 (27.7)	17 (14.3)	6 (5.0)	21 (17.6)	22 (18.5)	29 (24.4)	38 (31.9)	
2	27 (22.7)	37 (31.1)	24 (20.2)	13 (10.9)	16 (13.4)	6 (5.0)	16 (13.4)	31 (26.1)	31 (26.1)	35 (29.4)	
3	14 (11.8)	24 (20.2)	21 (17.6)	38 (31.9)	21 (17.6)	4 (3.4)	44 (37.0)	17 (14.3)	8 (6.7)	4 (3.4)	
4	87 (73.1)	21 (17.6)	3 (2.5)	3 (2.5)	4 (3.4)	5 (4.7.0)	42 (35.9)	7 (6.0)	6 (5.1)	5 (4.3)	
5	26 (21.8)	35 (29.4)	20 (16.8)	20 (16.8)	18 (15.1)	14 (11.8)	22 (18.5)	26 (21.8)	25 (21.0)	29 (24.4)	
6	14 (12.0)	21 (17.9)	5 (4.3)	3 (2.6)	6 (5.1)	12 (10.3)	19 (16.2)	33 (28.2)	23 (19.7)	23 (19.7)	
7	25 (21.0)	34 (28.6)	30 (25.2)	17 (14.3)	12 (10.1)	4 (3.5)	19 (16.2)	10 (8.5)	11 (9.4)	11 (9.4)	
8	29 (24.8)	34 (29.1)	20 (17.1)	24 (20.5)	8 (6.8)	6 (5.0)	13 (11.1)	19 (16.2)	31 (26.5)	50 (42.7)	
9	18 (15.4)	22 (18.8)	33 (28.2)	18 (15.8)	17 (14.9)	4 (3.4)	44 (37.0)	7 (6.0)	6 (5.1)	5 (4.3)	
10	87 (73.1)	21 (17.6)	3 (2.5)	3 (2.5)	4 (3.4)	14 (11.8)	22 (18.5)	26 (21.8)	25 (21.0)	29 (24.4)	
11	26 (21.8)	35 (29.4)	20 (16.8)	20 (16.8)	18 (15.1)	12 (10.3)	19 (16.2)	33 (28.2)	23 (19.7)	23 (19.7)	
12	42 (35.9)	40 (34.2)	16 (13.7)	14 (12.0)	4 (3.4)	38 (32.5)	35 (30.5)	18 (16.2)	18 (16.2)	9 (7.6)	

13	8	12	6	29	64	20	80	20	6	5
	(6.7)	(10.1)	(5.0)	(24.4)	(53.8)		(67.2)	(16.8)	(5.0)	(4.2)
	8	5	10	28	65		76	20	11	3
	(6.8)	(4.3)	(8.5)	(23.9)	(55.6)		(65.0)	(17.1)	(9.4)	(5.1)
14	64	28	9	8	9	21	91	16	8	1
	(53.8)	(23.5)	(7.6)	(6.7)	(7.6)		(76.5)	(13.4)	(6.7)	(0.8)
	59	35	14	3	5		89	8	7	5
	(50.4)	(29.9)	(12.0)	(2.6)	(4.3)		(76.1)	(6.8)	(6.0)	(4.3)
15	40	30	30	7	12	22	49	43	14	5
	(33.6)	(25.2)	(25.2)	(5.9)	(10.1)		(41.2)	(36.1)	(11.8)	(4.2)
	46	26	21	13	10		58	34	12	6
	(39.3)	(22.2)	(17.9)	(11.1)	(8.5)		(49.6)	(29.1)	(10.3)	(5.1)
16	4	10	11	35	59	23	78	32	3	4
	(3.4)	(8.4)	(9.2)	(29.4)	(49.6)		(65.5)	(26.9)	(2.5)	(3.4)
	9	9	12	39	47		81	26	4	3
	(7.7)	(7.7)	(10.3)	(33.3)	(40.2)		(69.2)	(22.2)	(3.4)	(2.6)
17	53	34	17	6	8	24	9	28	28	29
	(44.5)	(28.6)	(14.3)	(5.0)	(6.7)		(7.6)	(23.5)	(23.5)	(24.4)
	57	29	14	8	8		64	37	9	2
	(48.7)	(24.8)	(12.0)	(6.8)	(6.8)		(54.7)	(31.6)	(7.7)	(1.7)
18	24	30	29	25	10	25	32	53	20	9
	(20.2)	(25.2)	(24.4)	(21.0)	(8.4)		(26.9)	(44.5)	(16.8)	(7.6)
	24	35	28	18	11		60	40	5	8
	(20.5)	(29.9)	(23.9)	(15.4)	(9.4)		(51.3)	(34.2)	(4.3)	(6.8)
19	26	42	26	8	13	26	63	41	8	6
	(21.8)	(35.3)	(21.8)	(6.7)	(10.9)		(52.9)	(34.5)	(6.7)	(5.0)
	57	40	8	4	7		83	23	6	1
	(48.7)	(34.2)	(6.8)	(3.4)	(6.0)		(70.9)	(19.7)	(5.1)	(0.9)

27	2 9	5 1	1 7	1 6	4	34	4 6	5 2	1 3	5	1
	(24.4)	(42.9)	(14.3)	(13.4)	(3.4)		(38.7)	(43.7)	(10.9)	(4.2)	(0.8)
	6 7	3 5	8	4	2		5 5	4 1	7	5	8
	(57.3)	(29.9)	(6.8)	(3.4)	(1.7)		(47.0)	(35.0)	(6.0)	(4.3)	(6.8)
28	4 3	5 2	1 6	5	2	35	6 7	3 4	1 0	4	1
	(36.1)	(43.7)	(13.4)	(4.2)	(1.7)		(56.3)	(28.6)	(8.4)	(3.4)	(0.8)
	7 9	2 4	6	2	4		9 6	1 0	6	2	1
	(67.5)	(20.5)	(5.1)	(1.7)	(3.4)		(82.1)	(8.5)	(5.1)	(1.7)	(0.9)
29	3 8	4 3	1 7	1 4	3	36	3 5	4 0	2 3	1 6	4
	(31.9)	(36.1)	(14.3)	(11.8)	(2.5)		(29.4)	(33.6)	(19.3)	(13.4)	(3.4)
	7 5	2 5	8	4	4		5 9	3 9	7	4	4
	(64.1)	(21.4)	(6.8)	(3.4)	(3.4)		(50.4)	(33.3)	(6.0)	(3.4)	(3.4)
30	1 3	2 7	4 4	1 2	9	37	6 1	3 3	1 1	8	4
	(10.9)	(22.7)	(37.0)	(10.1)	(7.6)		(51.3)	(27.7)	(9.2)	(6.7)	(3.4)
	7 5	2 4	7	6	4		8 4	2 1	3	1	7
	(64.1)	(20.5)	(6.0)	(5.1)	(3.4)		(71.8)	(17.9)	(2.6)	(0.9)	(6.0)
31	5 4	4 7	1 3	1	2	38	6 6	3 3	1 1	6	3
	(45.4)	(39.5)	(10.9)	(0.8)	(1.7)		(55.5)	(27.7)	(9.2)	(5.0)	(2.5)
	9 1	1 6	5	2	2		6 4	3 9	8	4	2
	(77.8)	(13.7)	(4.3)	(1.7)	(1.7)		(54.7)	(33.3)	(6.8)	(3.4)	(1.7)
32	4 6	3 8	2 0	7	4	39	2 7	4 4	2 5	1 0	9
	(38.7)	(31.9)	(16.8)	(5.9)	(3.4)		(22.7)	(37.0)	(21.0)	(8.4)	(7.6)
	8 3	2 2	8	1	2		7 9	2 5	6	2	3
	(70.9)	(18.8)	(6.8)	(0.9)	(1.7)		(67.5)	(21.4)	(5.1)	(1.7)	(2.6)
33	1 5	1 4	3 6	2 2	1 5	40	7 2	2 4	1 1	8	4
	(12.6)	(11.8)	(30.3)	(18.5)	(12.6)		(60.5)	(20.2)	(9.2)	(6.7)	(3.4)
	6 9	2 7	9	8	4		7 8	2 8	5	3	2
	(59.0)	(23.1)	(7.7)	(6.8)	(3.4)		(66.7)	(23.9)	(4.3)	(2.6)	(1.7)

開発教育についての感想

1993. 7. 3

今学期の後半は、発展途上国について、いろいろな面から学習をしました。

- ① 先進資本主義国の多国籍企業をなぜ受け入れるのか？
- ② 貿易赤字はどのような産業構造や対外経済関係から生じてくるのか？
- ③ 債務はなぜ累積して行くのか？
- ④ 債務返済額が膨大化するにつれてどんな事態に陥るのか？
- ⑤ IMFコンディショナリティーはどのような結果をもたらしているのか？
- ⑥ 日本からのODAにはどんな問題点があるのか？
- ⑦ アフリカビジネスの経営戦略がどんな影響を与えているのか？
- ⑧ 「緑の革命」は農業や社会のあり方に何をもたらしているのか？
- ⑨ 支配層と民衆の間でどんな対立関係ができあがっているのか？
- ⑩ 武器輸入を中心とする軍拡は何をもたらしているのか？
- ⑪ 資源ナショナリズムをめぐって先進資本主義国との間でどんな対立があるのか？
- ⑫ 新国際経済秩序をなぜつくりだそうとするのか？
- ⑬ 平和のために国際社会でどんな役割を果たしているのか？

などの問題です。

これらの学習を通して、感じたことを下に書いてください。(無記名です)

1. 発展途上国について自分の考え方が変わった、と感じるようなことがあれば、書いてください。
 - 途上国が負しい理由はもっぱら途上国側にあるのだと思っていたが、むしろ先進国側が原因だと思ふようになった。
 - 先進国に對して、やられてばかりだと思っていたが、結構、反発行動をおこしていることがわかった。
 - 今まで「発展途上国」と聞いても、工業の遅れた貧しい国というような漠然とした感じしかわからなかったが、授業を聞いて、その実態がなんとなくなってきた。そして、先進国に追いつこうとする途上国の政策はほとんどが裏目に出て、かなり厳しい状態であることを理解できた。
 - 今までは、貧しい、遅れているといった感じしかなかったが、今では、先進国の進出のペースが速いことになったと思う。
 - 今までは、途上国のことを、「貧困だけ」の国と思っていたが、開発に関する学習の後で

は、途上国の問題、努力等がわかったようだ。でも、途上国を見下す態度が少しも残っていることは否めない。

- なし 2
- 工業化を途上国に進めているのに、先進国の企業の割高な値段の製品によって、それが妨げられていることを知った。非同盟諸国が膨張を訴えていることを知った。
- 発展途上国の、発展できない理由は、それらの国の国民の不努力に原因があると思っていたが、学習を通して、それは、発展途上国と先進国の産業構造のちがいが、経済・貿易の現代の体制にあると思った。
- 工業建設に失敗した国というように捉え方から、16世紀頃からの帝国主義圏が行ったことのためつくりだされた国々という捉え方をするようになった。
- 発展途上国は何もしないで、先進国にたよってばかりだとおもっていたが、多国籍企業に反抗するというような、自主的な面もあることがわかった。
- 発展途上国は、先進資本主義国の多国籍企業に、ただの金儲けの手段として使われているよな感じがして、色々、人権を侵害されていると思った。軍拡はムダである。平和が大切だ。
- 発展途上国の貧しさは、先進国や多国籍企業だけが悪いのかと思つたが、発展途上国の政府にも責任の一端があることがわかった。
- 発展途上国は、経済的に完全に先進資本主義国に抑えられていると思つていたが、財政難などは、多国籍企業が少し譲歩すれば解決することがわかった。
- これまで、発展途上国とは「後進国レベルの何もできない、先進国のかいらい」というイメージを持っていたのだが、しっかり「軍事を拡張し、「国民の生活水準低下」を招いてくれる「万年赤字財政」をキープしつづけるすばらしい政府があることを知った。
- これからの国際社会の『カギ』をにぎっているような気がする。先進国はもっと長い目で発展途上国の発展を見なければならぬ。
- 援助がヒモつきで、被援助国はかたりの支配を受けていることが分かった。
- 発展途上国なんているのは、先で、先進国にやられてしまっているというイメージがあったが、少しは抵抗できるようなので少しは見直した。
- 発展途上国をのびのびやませているのは、途上国自身の問題よりもむしろ先進国の方に責任がある、ということを知ってかわいそうだなと思った。
- 彼らは発展するべきではなかった。農業で自給自足をしていたら良かった。いずれ、先進国がそれをうらやむ日が来るだろうから。
- 発展途上国の開発が遅れていることの責任は、先進資本主義国にもかなりあるということ
- アメリカとの関係。決してアメリカに頼ろうとしているわけではなく、アメリカに支配されているということ
- 今までは途上国というと、(現在の) 貧しい、というほんやりしたイメージしかなかったが、

- 今では、資本主義国（先進）が途上国の発展の妨げになっている、という一面を知り、国がら
 かって同じ人なのだから、返さなくてもいい、えんじょをもう少しゆるやした方がよいと思う。
- 大きく変わった点はないが、原因など細部の知識が増え、理解が深まったような気がする。
 - 発展途上国は貧しい、ということしか知らなかったが、その内容や原因についてくわしく知ることができた。
 - 経済発展を抑制するような軍拡は非常に悪かだと思ふ。他国と紛争をわざとおこして国民を
 抑えるというのにも納得できない。
 - あまり、変わらなかった。
 - 発展途上国は、まだまだ研究や努力が足りないと思った。
 - 発展途上国は先進国から援助してもらいたがっているだけだと思っていたが、そうではない
 ことがわかった。
 - 特になし 3
 - 途上国は先進国に、自国の政治、経済を乱され、けっこうひさんだと思った。
 - いやいや本当に社会がどうなっているのかわかりました。むずかしいこともあったけど、先
 進国と途上国の関係のつらさがわかりました。途上国の人々に辛さをあたえようという仕事につ
 けたらと…
 - ない 3
 - 発展途上国が発展していないのは、発展途上国だけの責任ではなくて、先進国も大きく関係
 しているということが分かった。
 - 援助をもっとした方がいいと思っていたが、軍事費が多く占めている資金不足の原因と知り、
 軍費を回せば援助はそんなにいらなれと思った。
 - 単に良くないなあ、と思つたことが、ある程度のこと分かって、発展途上国の人たちは
 ある意味で被害者だなあ、と思つた。
 - 以前と変わらず、発展途上国が負いたい人は人の理由は、先進国に、弱みにつけこまれ、い
 ように使われていると思つた。
 - 先進資本主義国の方もたしかに悪いだろうが、やはり発展途上国も全く対策を考えていな
 ったのだから、どちらもどっちである。
 - 途上国にもっととがらなければならないのではないかと単純に考えていたが、そう簡単にはいかなら
 しいとわかった。
 - 発展途上国は、なんであんなにお金ももらっているのに、ひんぼりなのかと、ずつと疑問に
 思っていたが、その理由がようやくわかった。
 - 政府と民衆の意見の違いはよいどころでも変わらないと思つた。
 - 特になし
 - 今まで発展途上国は何をしようとしているのかよく知らなかったが、徹底的に工業建設を推

- めようとしていたということがわかった。意慢な国々かと思つていたが、苦勞しているようだ。
 新国際経済秩序というのははじめて知つた。
- 自分で悪循環をひきおこしている。
 - 途上国はあそこまですでにひやかつたとは思つていなかった。
 - 発展途上国は最初から発展途上国ではなく、先進国のために途上国になった。民族の優劣で
 はない。
 - 発展途上国は、これからどんどん成長していくものだと思つていたが、それはむづかしそう
 だ。何故なら、先進国は自国の利益のためだけに発展途上国を利用しているにすぎない、とい
 うことがわかったからである。
 - 自国に援助をしろ、という要求は、まことに勝手なものだと思つていた。今もそれに変わり
 はないが、でも、豊かな国が貧しい国に、税金を使って援助するのは当然だと思ふ。
 - 発展途上国は自ら投資していったと思つていたが、けっこう、日本やアメリカなどの先進国
 がかまわわっている点も多いと気づいた。
 - 今まで考えていたよりも発展途上国は先進資本主義国に対して反撃をし、自国の意見をしつ
 かりと持つていると思つた。
 - 発展途上国の貧しいわけは、元々は内の問題だが、外の、特に先進国の利己主義的な所も関
 係している。
 - 発展途上国の発展がなかなか進まないのは、国内にだけ問題があるのではなく、むしろ国外
 に主な問題があることが分かった。
 - 発展途上国の経済が予想以上に悪いこと、先進国の大企業によって途上国が垣はまれている
 こと
 - 発展途上国は、先進資本主義国に対してとても不利な立場にあるので、それを打開するため
 に強力な指導力を持った独裁者を作ることになるのも無理ないと思つた。
 - 弱者である、という考えに変わりはないが、やればできる (◎) じゃないか、という感じも
 した。
 - 発展途上国があらたな先進国になった時、経済的にすごくなると思う。
 - アメリカはけっこう悪い。
 - 全体的に変つた。今までは、なぜ発展途上国の経済が苦しいのかなどとは考えてもよみか
 った。また、日本のODAについてもよく分らなかつた。
 - 発展途上国というと韓国などアジアNIESのイメージがあつたので、考えていたよりずつ
 と苦しい状況下にあるのだなと思つた。
 - どんなに小さな国でも、立派な一國にかわりなく、それらがたくさん集まれば大きな力を持
 つということ
 - 今まで、発展途上国が発展しないのは努力をしないからだと思つていたが、そうでないこと

- 発展途上国は今まで思っていたよりもずっと国際的に不利な状況におかれていることがわかった。
- 発展途上国も逆しゅうしていいことを知った。
- 途上国政府が案外、国民の多教とかけ離れていると思うようになった。
- 先進国が発展途上国の成長をおさえているという点
- 発展途上国の発展には、先進資本主義国の存在が不利になっている部分を感じた。
- 日本は援助は、もっと世界に役だっていると思っていた。
- 発展途上国は先進資本主義国の利潤追求の場である。途上国の経済成長低下に先進国が大きく関与している。
- 特にかわっていないが、ここまで現状が進んでいると、たてなおしは、かなりむずかしいだろう。
- 発展途上国と先進資本主義国との経済格差は非常に大きいこと、封建的にも感じられる。
- 以前までは、発展途上国はあれだけ援助を受けているのになぜ、豊かになれないのだろう、と疑問に思っていたが、その理由が政府や先進国にあるということが分かった。発展途上国はもっと足もとをふか固めて（農業を大規模化する）から工業化を進めなければならないと思う。
- 発展途上国が負しく経済が成長しないのは、発展途上国の政治や国民がだらしなないからだと思っていたが、アメリカなどの先進国にかなり責任があったのだなと感じた。
- 途上国は先進国に追いつこうとして、かなり無理していると思う。先進国の援助は途上国を助けるのではなく、垂食するために使われていると思う。
- 発展途上国が負しいのは、その国の政府や国民のせいだけではなく、先進国が自らの利益のために介入したせいでもあること
- 発展途上国は、先進国の言いなりになっていると思っていたが、考えていたより、先進国に対して色々と対抗していると思った。
- 発展途上国が先進国に利用されているのがよくわかり、同情の念が強まった。
- 先進国に対して常に弱い立場にあった頭があらならないようなイメージがあったが、反撃に出る程度は成果が上がっているのと分かった。しかし、財政赤字から来る経済の悪循環の解消は、この現状では相当むずかしいことで、どんな変革が行われていくか案になる点がある。
- 僕はこの授業の前から、発展途上国の環境破壊などについては知っていた。元々先進国の政策には批判的だったから、発展途上国の考えが変わったということはない。しかし、先進国の政策のひどさには、改めて知らされるものがあった。
- 発展途上国はその国内部紛争などの問題が不安定であるから負しいと考えていた所、国外、つまり先進国がかけている圧力もかなりの問題が含まれており、色々な所に問題があるのだと思った。

- 先進国→死神。あわれ、我が日本に失望せり。
- よくわからなかった発展途上国が、身近に感じられるようになった。
- 緑の革命は有益とばかり思っており、途上国に対して、逆に悪影響があったということには知らなかった。
- 国民の利益になっていない工業化をすすめて、その償還返済のために国民の生活を安定したものにできない政府は、支配者の権力欲と富んでいる者の財産への欲だけなのだ。
- 政府にとって利益は何もないのはわかるけれど、無償援助は必要だと思った。
- 金ばかり呼び寄せていていざいらないのは援助をもっと有効につかうべきだ。軍事費を減らせ、しかし、いろいろな面で援助することが必要だ。
- 途上国もこんなに反響しているとは知らなかった。でも、これからも先進国の下に位置づけられなければならないと思う。だって、今まで弱かったものが急に強くなるというのは無理、それに途上国の発展は先進国の利潤増大のさまたげになってしまう。
- 今までは、経済開発の仕方が悪いから、なかなか成長しないのだと思っていたが、先進国側にも責任があることが分かった。
- OPECでぐくぐくしかし、途上国の力を知ることができなかったが、途上国の意見・主張がかなりひんばんに、いろいろな会議などで表明していることを知った。
- かつて民族主義が世界を滅ぼすと言われていたが、その言葉が論者の意図とは多分違った形で中絶していると思う。「帝国主義の搾取」ではなく、大規模資本と社会・共産主義と一体化した民族主義が国家をゆるがしていると思う。
- 前までは、途上国は貧乏、きたない……とただ思っていたが、それは日本、USAなどの先進国が作りあげていったものだと知った。
- 初めは、発展途上国が負しいのは、アメリカに対するための武器輸入と、一次産品の価格の不安定さだけかと思っていたが、思っていた以上に先進国企業の影響力が強いことがわかり、少々、同情のよちが出てきた。
- いままでは、発展途上国の経済や人々のくらしはくはくしい、ということだけ聞いていて、具體的にはどうなのか、またたせそうになったかを知らなかつた。そして、途上国の工業化と援助受け入れ、利子負担、赤字、赤字、生活の苦しきさなどの悪循環、先進国との格差がどんどんはなれていくことか心に残った。
- 途上国に先進国のゆり豊かのしわよせがききえていることは、前々から分かってはいたが、そのしわよせを来させている先進国が途上国に対して、身勝手な行為をするのには腹がいやだった。
- 今までは、途上国という、ざらざらなイメージで、もう腐った国家というイメージだったけれど、先進国と色々な交渉をし、復活しようとしているんだなあ、と思った。
- なぜ、他の先進国から援助をたくさんもらっているのに、発展途上国は発展しないのか疑問に思っていたが、それがよくわかった。

- 発展途上国と言えば、いつも被害者の宿命を背負った国々だと思っていたが、先進国への反撃を試みたりなど、それなりの向上心のようなものがあるのだなー、と思った。
- 先進国の経済戦略にやられっぱなしかと思っただが、反撃をやっていたんだな、と思った。
- 特に変化しないが、「閉鎖」教育とか言う一連の授業を受けて、あーまいにだか感していた。事の具体的、理論的立証がなされたのではないかと思う。
- 日本は途上国に対して援助を世界一していると言うが、その内容は贈与ではなく借款の割合が多い。先進国は途上国の言い分も聞くべきである。
- 負いので良い物もないかと思っていた。兵器をかう金があるとは思わなかった。
- 2. 特に興味をもったところがあれば、書いてください。
- ⑦、⑧、⑩
- 民族紛争や、政府への抵抗などの理由がわかり、ニュースが理解できるようになった。
- 発展途上国の反撃によって、先進国との関係はこれから変わっていくのか。
- ⑩
- 債務金融について
- 途上国の外交政策と軍拡
- アグリビジネス4
- 「緑の革命」よりあとの軍拡などについて、NIEOのこと
- フレトン・ウッズ体制、冷戦、ベトナム戦争、EECの成立などの歴史的なことがらの背景にある経済の動き
- ⑨、⑩
- 「緑の革命」のところ
- IMFコンディショナリティーでかえって貧困を招いていること
- 途上国の多国籍企業に対する債務について
- 国連に対して集団として発言権を持っているとは思わなかった。
- ⑫
- いつも被害をうけるのは、下層部の人々である。
- 先進国と発展途上国との関係について金ばん的に内紛に陥る所
- IMF・GATTの詳しい内容
- ODAについて
- 新国際経済秩序とか、IMFコンディショナリティーの話
- ODAなど日本との絡み、アグリビジネスの経営戦略と途上国の関係
- アグリビジネスの内容、行動、影響
- 緑の革命の成果、ひもつき援助
- いろいろ
- とくにだなし
- ⑥、⑨、⑩
- 特になし 3
- 支配層と民衆の対立 3
- 援助ですね。(ODAの活動、先進国)
- ない 2
- ODAには贈与と借款があり、日本は贈与が多い(ママ)ということ
- 日本のODA 2
- 特になしです。
- 日本のえんじょの大半がひもつきであること。
- なし 2
- 軍拡について
- コンサルタント企業はせいこい。アメリカはひどい。アグリビジネスもひどい。
- 軍拡のところと貿易赤字のところ、債務のところ。
- 先進国の経済閉鎖への介入による、途上国への影響
- アグリビジネス(穀物・ジャワ)の経営戦略 穀物の援助によって原地の伝統的農業を消滅させる方法
- 資本主義経済では努力したものが勝つと思ってしたが、それがまちがいであったと思われる所
- 大財閥について、ベトナム戦争
- NIEOの発展のようす
- IMFが、途上国に対して、とんでもない要求をしているところ
- ⑤の分野とアグリビジネスの経営戦略
- ⑥
- 新国際経済秩序のところ
- 発展途上国は核抑止論を批判しながら、軍拡を続けているという本音とたまたまえの違ひ
- アメリカがいろいろ悪いことをやっていたこと
- 日本は国連中心主義などというが、国連はあまりにも先進国の影響が大きすぎ、途上国に対しては無力であること
- 10年周りに原気が変わる
- アグリビジネスの経営戦略がどんな影響を与えているのか。債務はなぜ累積していくのか。
- 途上国についてのこと

- ① 途上国について
 - ② 武器輸入が、自分の政府が倒されたいための防衛に目的をおいている点
 - ③ 途上国の抵抗について
 - ④ 先進国のODAは誰れのために行われているのかということ
 - ⑤ すべて
 - ⑥ 日本のODAについてのところ
 - ⑦ アメリカの共産主義者の弾圧
 - ⑧ 途上国の反撃
 - ⑨ 「緑の革命」
 - ⑩ 途上国の貿易赤字が慢性化するしくみ
 - ⑪ 債務のこと
 - ⑫ ODAの話
 - ⑬ 社会主義を目指そうとする考え。ODA援助の日本の贈与比率について
 - ⑭ 「価格の決まり方」など身近なところが面白かった。
 - ⑮ 経済に力のない発展途上国も米ソの対立に中立で、争いを大きくさせないようにつとめている。また、その権限も持っている。平和のための国際社会に貢献している。
 - ⑯ 急激な工業化が、なぜ今の途上国では成功しないのだろうか。債務をすべてなくてすくすくするにはどれくらいどの年月がかかり、またどのような手段をこうじればいいのか。
 - ⑰ アグリビジネスについて
 - ⑱ 利潤の考え方
 - ⑲ ④。経済進出を受け入れた結果による先進国の公害の輸出
 - ⑳ やはり、環境破壊の所である。僕が今調べている過労死問題は企業戦争といわれるが、この戦争がここに来て伝わってきているということがよくわかった。
 - ㉑ 労働価値について
 - ㉒ 利益のみを求めろみにくい先進国ども
 - ㉓ アグリビジネスを通じてのアメリカの世界一の影響力
 - ㉔ 「緑の革命」という名の経営戦略がたまたらしたもの
 - ㉕ 緑の革命について
 - ㉖ ODAの問題点
 - ㉗ 全部、とても面白かった。
 - ㉘ 先進諸国が、まさに欲望をまるだしにして、途上国の富をうばい去ろうとしている点。南北問題の解決は、先進国の、とくに企業などの考え方がわからなくては、成されないと思った。
 - ㉙ 国際関係のことは、ある程度の流れは知ってたのでおもしろかったが、経済構造のところはまったく知らず、これもまた別の意味で興味深く、おもしろかった。
 - ㉚ 多国籍企業の商業戦略
 - ㉛ 援助とビジネスの関係
 - ㉜ 債務はなぜ累積して行くのかという所
 - ㉝ 新国際経済秩序の考え方とそれの影響など
 - ㉞ 途上国の債務が年々増大するのに、貸借国ともに効果的な政策を打ち出せず、泥沼にはまっていること
 - ㉟ ⑥、⑨、⑫
 - ㊱ 発展途上国がなかなか発展しないのは、地形や人口などのことからどうしようもなく発展できなかつたと思っていたが、実は、先進国からの債務などから、どうぬま化してしまっていて、それに対し発展途上国もいろいろ努力しているのだと思った。
 - ㊲ 平和のために、国際社会でどんな役割を果たしているのか
 - ㊳ 社会的見地(?)からの途上国(もっと言えば国家)の見方はあまり知らなかつたので、ほとんど全て等面だった。公民分野(?)としての見方は具体的(且つマクロ)なので、根本的な理由に対する興味はこの授業で満たされたものであると思ひ、残念だが我慢する。
 - ㊴ 日本がケチなところ
3. 疑問に思ったことがあれば、書いてください。
- ㊵ 多国籍企業の発展について
 - ㊶ とくにない 4
 - ㊷ ⑫
 - ㊸ 現在、途上国の開発が進んでいるが、もしもその開発が完了した時、すなわち現在の先進工業国に近い状態となったとき、貿易黒字、利潤生産の弊害のはきだめとも言える国々がなくなると、「好況」がなくなるのではないか? と思った。
 - ㊹ なし 9
 - ㊺ 冷戦が終わった今、発展途上国内での政府と反政府勢力との対立はどのようなようになっていくのかというところ
 - ㊻ なぜ、平和的に、国内の反抗組織と仲置りができないのか
 - ㊼ ない 4
 - ㊽ 特に無し
 - ㊾ なぜ自給自足の生活から無理に近代化に走ったのか?
 - ㊿ 特になし 10
 - ① アメリカの様々な行動
 - ② IMFは、どうしてあのような暴を強行したのか? 途上国の貿易赤字がふえるのがみえなかつたのか。それとも、ただせつばつまったせとぎわでの策だったのか?

- 僕が疑問に思った所は、途上国がなぜ受け入れられるか、ということである。つい最近行われたアンケートでは、日本人の5割以上が今の生活は豊かでないと答えるのに対し、発展途上国では8割以上の人が今の生活は豊かであると思う。国民が望んでいるのは、今回出てきた工業化のような政策ではないように思う。もって国民のためになる政治が必要なのではないか。
 - なぜ、このような問題が一般市民によく伝わらないのか？
 - 途上国が何百と集まっても、大國が少し動かしただけで抑えられてしまう。弱者がたばになっ(途上国首脳会議、OPECなど)もだめだと分かってはいるのに、他に対応策をとらない。たとえば、アメリカに併合されれば国から州にかわりますが、力は前より強くなると思う。なぜ、変わった政策をとらないのか？
 - 途上国は、なぜ工業化に希望をたくすのか。自給自足社会の復活などは考えないのか。
 - 第3国(ママ)が主導の国際経済秩序を作るのは、地理的環境や資本の関係から無理だと思えるか。
 - ⑩の所の発展途上国の矛盾した考えが納得できなかつた。
 - なぜ、先進国たちは、発展途上国をどどん赤字にしてしまっているのに、改めようとしな
 - いのか？
 - 途上国は武器輸入により、国内の紛争を鎮圧しようとしているが、内紛の主な原因はどういう面にあるのか？ 武力行使以外の頼め方はないか？
 - 事象を見解する(ママ)のに、どの様な立場、見地をとればよいのか、この科目においては固みにくくて…。純粋科学でも無いし、人道的な面もあるし…。
 - 別にない
4. もっと知りたいことがあれば、書いてください。
- 途上国の農業について、特に知りたい。
 - とくにない 2
 - ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿
 - 債務全般について
 - 幕の革命とアグリビジネスに関することをもう少し詳しく知りたい。
 - なし 7
 - 現在の世界の経済の状況
 - ⑩の対立の歴史や実例をもっと
 - 国際秩序について
 - すばらしい
 - 途上国の多国籍企業に対する債務について
 - 大戦直後の世界の経済

- とくになし
- なぜ、IMFコンディショナリティを進めるにあたって、あの程度のことか先読みできないのか？
- アジアニエスは例外的な発展をとげたというけれども、なぜそのような例外がおこったのでしょうか。
- ないです！
- 日本の経済援助は贈与比率が少ない！と他の先進国から批判されるが、援助がアン・タイドであるかないかについて、何故議論されないのか？ アン・タイドにしないということには、結局、贈与をした国に金が戻ってくるのではないのか？
- 発展途上国は本当に支配層と民衆に分かれ、差がはげしいのか。
- 債務は結局どうなるのか。
- 特にないです。
- 途上国が黒字になることは、先進国が赤字になるということで、先進国は、だから援助を怠
- 「緑の革命」、IMFコンディショナリティは、影響をわかかってやっていたのか？ またさ
- か、そんなことはないと思うけど。
- 返済額が多量にあるのに、何故武器輸入を続けるのか。
- 支配層と民衆の間の対立に大國が介入するということは、冷戦が終わったと言われている現在でも引き続いて起きているのかどうか。
- 発展途上国の生活の現態がどのようなものなのかということ(もっとくわしく)
- なぜ恐慌は回避できないのか。
- なぜ、自國の伝統をこわしてまで閉塞をするのかということ
- 特に無し。分かりやすかつた。
- 債務がたまって工業化しようとする動機がよくわからない。
- 途上国は自分達の軍拡を棚に上げて、先進国の軍拡を一方的に責めたてている点、おかしいと思つた。
- わかりやすい説明だからかな
- 何となく、全体像や全体のつながり、またアン・タイドの私たちとの関係をつかめなかつた。
- 多国籍企業になるためには(ママ)
- 日本の経済援助の行き先はどこなかがわからない。ただ多額をだしているだけで、どの国にどのようにつかわれたかを発表してもいいと思うのに…
- 急激な工業化が日本では成功し、なぜ今の途上国では成功しないのだろうか。債務をすべてなくすにはどれくらい年月がかかり、またどのような手段をこころいければいいのか。
- なぜ、みんな自分の利益のためになることを優先させるのか。

- 発展途上国の民衆の動き
- 日本もアメリカなどから途上国と同じようなあつかいをされたことがあるのに、今のような豊か nation 化している。いったい日本はどうやって途上国のようにならずに済んだのか知りたい。
- 発展途上国の軍拡について
- 資源ナショナリズムの石油以外の例
- 特になし 5
- より、詳しく！ すべてについて
- とくになし
- ⑥をもっとくわしく知りたい
- できれば、援助のわりあてかな？ 朝ITVでやってたけど、ロシアの人々は直接金をもらいより、技術の指導を優先してほしいんだって。
- 特になし
- もし、すべての国が同じようにもうけ、同じように損をするようになり、先進国・発展途上国などという呼び方がなくなったら、私たちの生活は今とどんなふうにならちがってくるのか。
- 軍拡についての途上国の言い訳
- 国連はどのようにしているのか。
- 発展途上国の軍拡する理由
- ⑩、⑪
- 国連に途上国の意見が多くとり入れられている（平等になっている）ことについて、そのけいとか（それまでなら、先進国主導なら平等ということは考えられないはず）。
- 現在ASEANやNIESなどは経済成長率がたいへんよいと聞いているが、その成功のメカニズムが全くふれられなかったのは残念。これらの国々も援助を受けて開発をしてきたはずであるから、そこが知りたかった。
- 債務が累積していく問題を、今後どのように解決していけばよいか。
- つまるところ、途上国の経済向上はあるのか、ないのか。
- 大財閥について、アメリカ、ベトナム戦争
- NIEOの今後の発展のようす
- ⑧と⑩、⑪
- 強者の論理、自由・平等・無差別
- 新国際経済秩序構想のその後の動き
- 発展途上国はこれから先どうなっていくのかという見直し
- ソ連（社会主義国）の問題について
- 武器輸入する支配層と民衆
- 管理価格などをとする独占体に対して政府は何もできないのだろうか。
- 景気を操作する法
- 途上国への援助や途上国のリスケネジメント・ジョーリングに対する先進国の世論
- 現在の世界の武器などについて
- 新国際経済秩序のなかみについて
- 途上国の軍事政権について、CIAについて
- ない 3
- 資本の構造について
- すべて
- 途上国が本当に発展できるように、先進国が今ややっている具体的なこと
- 日本のODAについて
- 特になし
- 債務、とくに日本のODAなど
- ODAの話
- 実際の国と国との金の取引きの仕組み、ソ連の崩壊の意義、石油産出国のこれからの展望と対策
- うーん、ない
- 発展途上国は国民の生活が貧しいのに、なぜあそこまで軍拡をする必要があるのか。周囲の国と軍拡の削減を決めるとか、国民に納得のいく政治ができないのか。
- 発展途上国の政府とアメリカとのつながり
- 先進企業による資源と富の取奪に対する抵抗はおもしろかったが、もっと実際の状況を知ってみたい。武器輸入を中心とする軍拡が、いまいちものたりなりなかつたような気がする。
- 発展途上国の現状
- 日本、アメリカの暴走
- 独裁的な支配体制の政府を持つ発展途上国での民衆の動きを具体的にもって。
- 途上国政府は国民をどのようにして抑えているのか。武力弾圧の他にも、思想統制など行っているとおもいますが、どのような方法なのか。武器は毎年増えていると思うが、そのうちあまりはじめてしまっているのか。それとも武器はあればあるだけ使いきまっているのか。
- ① 日本が、いかにして援助をしようとしているのか。② 途上国の行動の矛盾（資金のつかいかたなど）。③ 日米関係の打撃について。
- 軍拡の必要に関する具体的な背景
- 石油関係（OPEC、米石油会社など）をもっと詳しく知りたかった。今度は国内のことも知りた。アメリカ国内も詳しく（ウォーターゲートとか）。国連について。歴史からみる経済構造の変化。

- 核兵器と先進国の軍縮・途上国の軍拡
- 資源ナショナリズムと途上国
- 世界のそれぞれ経済圏について
- 援助額のうちわけを知りたい。どのように使われているのか興味がある。
- 途上国の武器輸入が莫大な数だという事に驚いた。そうした途上国内ではどんな問題が生じているのか。
- なぜ軍拡をするのか。軍拡を止めようとしている人々の活動などをくわしく知りたい。
- どうすればこの様な（授業で取り扱った問題全て）事が解決されるのか判らない。しかし、これさえ判ればこれほど色々、困らないのでしょうけれども。「解決すべきなのか？」という疑問も残る（「仕方が無いのか？」と同様）。
- 既習の範囲を理解するだけで精いっぱいなので、ない。
- アメリカが行ったずるい事。株について。
- 面白くなかったことがあれば、書いてください。
- なし 14
- ない 5
- 特になし 6
- 特になし 2
- とくになし 2
- ③はなんとなく非現実的
- 無し
- 全くない
- とくになし 2
- いやいや結構です。
- 自分の生んでいる先進国が批判ばかりされたこと（まあ、本当だからしょうがない）。
- 特になしです。
- 大団を悪にしたがる傾向があるような気がする。もう少し授業は公平であるべきではないかと思う（大団はたしかによからぬことをしているが）。
- アンケート
- 全てアメリカが悪い
- 途上国に同情的な部分が多くて、先進国がそんなに悪いのか、と思った。先進国、途上国の二面から見る授業だったらもっと良かった。
- 労働価値論などは机上の空論のような気がするがしてあまりピンとこなかった（意外な理論だった）。
- 授業が早い
- アメリカはやっぱひどい
- 特になし
- 全くなし
- 利権について
- IMFコンディショナリティ
- アメリカの悪い面ばかりを、他国に比べて多く話した事
- アグロビジネス、軍拡
- 面白い
- 日本の暴虐に失望
- 日本とアメリカいじめの時だけ力をいれるな。資料で左よっばい出版社だけを使うのはやめてほしい。
- ない。とても楽しかった。
- おもしろかった。ためになった。
- ⑥、⑨、⑩以外は可もなく不可もなくといったところです。だいたい興味をもつ度65/100といったところです。全体として、全く面白くなかったものはありませんでした。
- 1学期の前半
- 2で、公民的視野の見方に対して述べたのと同じ理由で、全て等面である。国家やら何やらについて考える時の見地は、自分の場合、吉本隆明の「共同幻想論」とか本筋でないものを読んで来ただけなので、非常に屈折しているのかも知れない。しかし、「共同幻想論」もこの様な（途上国だけが被害者ではない）問題の根本であるものを打ち破る為に書かれたのではないのでしょうか？（でも吉本隆明は文学者だしなー）
- 授業終了問題になってビッチが上がるため、内容がよく理解できない。
- 全部おもしろかったので、なし。